

冬 雷

短歌雑誌

TOURAI



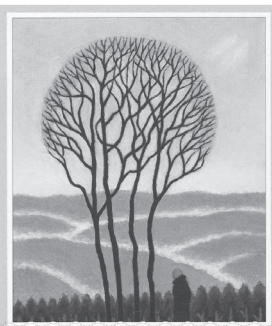
二〇二五年五月一日発行（毎月一回一日発行）
第六十四卷第五号（通巻七五九号）

5月号・2025年

冬雷の表紙絵をたどる

一九九九年

二〇〇〇年



一九九九年十二月九日木島茂夫主宰が急逝され、小誌は二〇〇〇年より新体制となった。その一月号は、一部の記事を急遽差し替え、そのことを伝えた。

上は大山敏夫歌集『春』をテーマに、下は川又幸子歌集『低き山々』をテーマに加納久が描いた表紙絵となる。歌集を読んだのイメージを描く特徴ある表紙絵がこの後数年継続することになる。小誌編集室では、のちにこの絵を使い川又の文庫版歌集『歲月』、及び大山の同歌集『朝昼夜』の表紙カバーに再利用した。

二〇〇〇年一月号の本文は88ページであり、二六四名の出詠が数えられる堂々たる誌面であった。《編集部》

5月号 目次

冬雷集	1
作品一	16
五月集	31
残響集	36
作品二	42
作品三	58
三月号冬雷集評	山本三男 13
三月号作品一評	小林芳枝・藤田夏見 14
三月集 / 残響集評	鈴木やよい 30
三月号作品二評	井上菅子・江波戸愛子 38
三月号作品三評	桜井美保子・橘 美千代 40
三月号十首選 (冬雷集・三月集 / 残響集)	42
三月号十首選 (作品一・作品二・作品三)	44
歌集 / 歌書御礼	佐藤靖子 47
横山岩男 遺稿集『奇跡の時』	大山敏夫 50
歌集『明石の門』松森邦昭著紹介	小林芳枝 52

冬雷集

大山敏夫 埼玉

かのこ帯美空ひばりのさびふるへ老骨ひとりふるひたたしぬ
弾けつつ嫂のうたひてゐたるかな「右のポッケにや夢がある・・・」

水団が大好きだつたといふ話戦後の闇市時代のほひ
胸ふかく秘むる泉を乱したる小石のありて一首遣りぬ

うらごゑは濁らず甘く転がりて意味追ふこともなく聴き入りぬ
涙ぐみうたひぬしといふ映像のこめかみあたり汗ながれをり

簡単に言うてくれるな「いい女だよなあ」なんて美空ひばりを
ゼレンスキーと怒鳴りあひたるランプに美空ひばりを聴かせてみてよ

赤間洋子 東京

美大卒六十四名の展覧会個性あふれる作品並ぶ

通信生我を含めて十名も分け隔てなき展示が嬉し

教へ受けし教授は来られずNOONにて作品映し挨拶もする

展覧会終了の日に言ふ人あり我が作品に魅力感ずと

良き師あり発表の機会与へられ染色続けて三十年経る

この秋も研究会公募展グループ展多忙でありて生甲斐でもある

短歌も染めも我が生活の一部なり続ける意欲保ちてゆかむ

兼 目 久 栃木

ストーブを正面に置き一日をストーブのそばを離れられずに

朝五時に新聞配達のアートバイの音して一瞬道は明るし

陽がさして西空見つつ運転す赤銅色に染まれる連山

生葱の青き茎をば細かく切り納豆に入れば辛く甘みあり

勝道上人が千二百年前男体山に登りたり道なき道を尋ねて

登山道も無き頂上に登りたり勝道上人の信仰登頂

中国の男子成人多かりき女子少なくて結婚減りき

三十人書道仲間に講演す中国旅行と中国の歌を

寒暖の差ははげしくも昨日の雨は転じて雪となりたり

山 崎 英 子 東京

紙に巻き仕舞ひ置きたる雛の顔の紙取り除く祖母との思ひ出

春の雪降り次ぐ今日は雛の日あられも消えて賑やかに

白酒を召されてほんのり右大臣収まりいますテレビの前に

厚焼の祖母の作りし太巻き寿司の楽しみなき弟妹と

煙るがに春の雪降る土手の上路の臺いくつ気にしつつ往く

新宿の街の真中に住み乍ら路の臺が食べられると喜びて

淡味に煮たるふきのとう美味しくて食が進むと話し合ふ

今少し過ぎたら露も煮られると土手を氣にして往き来する道

森 藤 ふ み 東京

齒科医出で東御苑へ足のばす温き日差しを身に浴びたくて

地下駅より地上に出でれば大手門見え来て急ぎ信号渡る

大手門の荷物検査に並ぶ人十人くらゐ待たずに入れた

三の丸尚蔵館職員の予約無しでも入れますと声かけられる

予約せずシルバーパス見せ無料にて入館出来る今日は良き日よ

仄暗き部屋の天井高くして壁の鶴の絵飛び立つ姿

巡り見るに程よき広さの館内に疲れのあらず庭園に行く

落ち葉せる大けやきには木のベンチ春の日ざしに温められて

大けやき囲むベンチの木の温み腰掛をればとろりと眠し

富 田 眞紀恵 富山

どこまでも青のひろがる今日の空生きゐる吾をはげますごとく

オーイと呼べばハイと一言が降りくるやうな今日の空かな

女の児 櫻 井 一 江 東京

バス待ちの我が前父と並び来る保育園児つと止まりたり

澄み渡る空を見上ぐる女の児指差し父に何やら知らず

児の丈に屈みて見上ぐる父親の姿ほのぼの温みの有りて

自転車の所狭しと並べある役所の庭に梅の樹一本

梅の樹の細き枝えだ四方に伸び豆粒ほどの蕾の付きぬ

北国の豪雪ニュース続くなか春の近付き教へる女の児

忙し気に行き交ふ人の街に立ち女兒は花木の觀察為したり
春見つけ喜び勇みスキップして女の児は父と笑顔のままに

有 泉 泰 子 山梨

経験をしたることなき大雪とぞ金沢の叔母いかにいますや
まあ泰ちゃん電話の叔母の声弾む明るき声に吾が胸に花咲く
暖かな陽射しに誘はれわが庭の枯草ととのふ腰かばひつつ
庭石の下より椿の葉を伸ばし葉陰に一つつぼみのふくらむ
膝の痛み忘れてをるやクラス会へと夫はむかふ自転車こぎて

「かいじ号」待つ人の群れなつかしき父母に会ひにと行きたる日々よ
「かいじ号」乗ることもなくぼんやりとホームの賑はひ道路より眺む
久しぶり医院の帰りに駅散歩「かいじ号」に会ひピアノ演奏をきく

野 村 灑 子 千葉

受話器とる「はい」といふ声の高ければ機嫌いいナと話すべく向かふ
厨房に中国語とびかひ働ける人等フライパンに音させてゐる
飲む事を忘るるなかれと次回分器の蓋の紙に書き貼る

湾に沈む陽の光よけむとかざす手のアカギレ深し赤く口あく
送迎車に沈みゆく強き陽をさけてアカギレ深き手をかざしゐる

高校時代我が家にはテレビなく友の話すプロ野球の話にはついて行けざり
男の子なく姉妹のみの我が家にはプロ野球の話は場ちがひなりしよ

青 木 初 子 神奈川

一、二月降りたる雨の少なさに白木蓮の花は小さし

寒さ避け冬の間枯らさず育てたるスナッブエンドウに恵みの雨降る
久々の降りたる雨に茎太く育つエンドウ緑の冴える

脇の芽の育つ期待を持ちながら肥を追加するスナッブエンドウに
倒木の怖れありしか桜樹の幹に伐採の目印の付く

街路樹の桜の伐採待てぬのか十日の後には花ひらくのに
ひと抱へ優に超えたる桜木の花ひらくまで伐るな役所よ

中 村 晴 美 茨城

暖かきと鍋を食べたき寒き日とこれはまさしく三寒四温
枝先にびつしり丸きが膨らみて杉花粉のいつ弾くるか

食料に一万円の軽く飛び老後のプラン狂ふ物価高
預貯金の減りの早きに年金の申請迷ふ夫六十七歳

二十年メールアドレス変らざり格安スマホみづから遠ざけ
細き茎スノードロップひとつ咲く肥料足らぬか多めに追肥
玄米を一日浸して炊いてみる痩せる例ありネット情報

一時は薬に痩せる事もあり今はすっかり元の体重

吉 田 綾 子☆ 茨城

枯れたらと思うし老梅半日の降雨に潤い花をも見付く

近頃の前のめりなる体形に息子求め来シルバーカーを

「これで良し」とちょっと早めの就寝に一日の流れ省みるなり

音も無く降りいる雨に軒下の菊鉢そつと外に出し置く
遠き日を現が如きもの言いの夫の介護に我もうなずく
暇を惜しみつつ国会中継聞き入るに質疑する女性議員こえはげし
蜘蛛膜下出血の手術を受けて四ヶ月姉の退院すぐさま施設へ
バレーボールのキャプテンをなし活躍せし学生時代の姉を恋うなり

山口 嵩 福島

喜ばせ我もよろこぶ敏行氏笑顔のままで安積の空へ

仲間らに慕はれ笑顔で旅立てる西田の背を追ひ涙す涼子

冷風の吹けど蕾は日々育ち佇み眺む夕の安達太良

枝々の芽吹きの色も濃さを増し撒きたる粟に雀むれゐる

木々の間の吾妻眺めつつ散策の小径に沿ひてカタクリ芽生ゆ

病院も目標なるか発射するボタンの先にエゴの影燃ゆ

取り引きの策か品なき言動の裏に蠢く私欲利権が

トランプの振舞ひ是とす党員はどんな幻像抱き歓喜す

酒 向 陸 江☆ 東京

中央線上りホームに滑り込む二階建て電車にめぐり会いたり

新しき車輜は前向き坐席なりわずかな区間を旅の心地す

二階席に見放くる景は若き日のぎゅうぎゅう詰めの通勤通学

山火事の続くニュースに雨降れと祈る毎日友も同じと

三月^{みづき}ぶり降りたる雨は雪となり冷えくる寒さに湯気立つおでん

この雨を待っていたのか庭の花頭を持ち上ぐクリスマスローズ
新築のマンション解体始まりぬ解体音の尋常ならず

「騒音の耐え難ければいらっしやい」と卒寿過ぎたる友とお茶飲み
友たちと五目寿司作り雛祭り喜ぶ吾らは皆高齢者

天 野 克 彦 大阪

冬枯れの庭木に春の兆しありさやぐ枝々赤らみて見ゆ

窓さきの木に来て啼ける鋭き^とこゑはわれを呼ぶごとと鴨のこゑ

固かりし木々の梢はゆるび見せ木の芽にとりつく鴨の群れ

枯芝にみどり萌えでる頃となり降る雨見れば春は来にけり

わが窓ゆ眺むる山の大方は見尽くしたれど飽くることなし

山肌のあらはに見ゆるひとところ植林するらし人動く見ゆ

老梅の苔むす幹をひたすらに登りゆく虫この小さき蟻^{きざはし}（京・北野天満宮）
石段のかたへに咲ける白梅は参拝びとに類笑み返す

高 松 美智子☆ 栃木

基礎疾患は骨粗鬆症なり転倒後の痛み増しきてベッド上の人

寝返りに強き痛みを訴えて姑の介助は夫とふたり

食が落ちベッドに臥して半月の姑の背中^の赤み気になる

ぶり返す熱と痛み^に受診せる泌尿器病棟に入院決まる

コードブルーコードホワイトトナースステーションに表示されいる内線番号

レントゲンに見えざる骨折MRにありあり映る腰椎のつぶれ

いくつもの病と付き合い乗り越えきたる九十八歳の圧迫骨折
 抗生剤効かざる菌が存在すると尿路感染のぶり返す熱
 骨折後あらたに加わる病名は尿路感染と廃用症候群

高橋 説子 栃木

案外に簡単だったコンビニのコピー機に取る印鑑証明

右ひだりのグーチョキパーを一つづつずらす手遊びに一年難儀す
 両の手の「ひとつずらしのグーチョキパー」を克服せんと歩調に合はす
 新しくこなせるやうになったこと有りて嬉しや今月ふたつ

一人旅のやうで独りでない距離に一人参加の九人は居る

五十年ぶりの津和野の堀に見る丸まるゆつたり肥満鯉あまた
 改修中の錦帯橋の橋桁にこれはラッキーとシャッターを切る
 結ぶ前に検索したり大吉の御籤の言葉「勇往至険」

大塚 亮子 東京

縁日に梅の鉢植ゑ選る父の背中を見つつ暫くを待つ

父に手を引かれて巡る植木市わが楽しみは帰りの綿あめ

屋根に雪残れど日差しの暖かさ喜ぶ姉の弾む声聞く

この夏は墓参に帰ると独り住む姉に伝へてわれも待ちをり

何年振りか降り立つ駅に馴染みたる店見当たらず見知らぬ街に

新しき商店街は小ざれいで暖簾くぐるに少しためらふ

十ヶ月手入れ怠るわが庭の水仙の花芽一つだに無し

千両に万両赤くなるは無し葉のみ繁りて反省しきり
 春雨の容赦なかりき咲き残る梅の花びら地面に散らす

担々麺 嶋田 正之 埼玉

夜明けかと寝ぼけ眼に見る窓に午前3時の強き月光

六本木麻布十番に好物の担々麺を食みしは遙か

担々麺の旨い店舗を探しつつたどり着きたる丸ビルの店

新丸ビルに四川料理の店見つけ独り密かに通ふ楽しみ

窓外に東京駅を見下ろしてすする担々麺至極の時間

茶芸師の注ぎて呉る手際良さヨーお見事と声を掛けやる

東京に出掛ける折りには出来るだけ東京駅を経由と決めて

退職後自宅近くに担々麺求め探せど遂に至らず

ラーメンと餃子の旨い店見つけ時折独りの昼食とする

江波戸 愛子 ☆ 埼玉

母逝きてちちの選びし仏壇の位牌二柱に両手を合わす

芽の出でぬ鉢の多さを子は言いてゴミに出したり夫に言わず

まりちゃんと幼きころに呼びていしまりちゃん町会の役員になる

町会の役員すすめてくれた人老人会を立ち上げると言う

老人と思わず暮らしてきたりしが今日実感す老人吾を

ひさびさに作るカレーは母の味夫は旨いと言いてたべおり

重き荷の届きて娘に伝えれば茨城産の干し芋という

十五日朝から夫は嬉しそう孫に小遣い渡すと言いて

橘 美千代 新潟

医院近くスーパーまへに人身事故亡くなりたるはわが患者さん
交通事故にて逝きたる人の十日まへ受診せし時の表情うかぶ
トランプとゼレンスキーの口論に本音の外交見せてもらひぬ
臆すなくトランプにしかとの言ひしゼレンスキー大統領われはたたへむ
侵略さるる小国を搾取せむとするに大国の長たる品格あらず
寂れたる温泉街の奥ふかく木造三階建ての旅館たつ
温泉へつづく坂道たち並ぶ空き家いく棟雪に囲まれ

廃屋の門から玄関まで埋めて踏まれてをらぬ雪積もりたり
母にはひ孫われには孫の誕生を待つは希望よ未来みつめて

ブレイクあずさ☆ カナダ

アメリカのものは買うまいされどああこの地に育たぬオレンジの艶
三軒目ようやく会いたるオレンジはメキシコ産なりラベル輝く
Made in USA ゆえ酒屋より月桂冠消ゆ松竹梅消ゆ

アメリカの知性を踏みつけ踏み散らしいづこへ向かう裸の王様
湖の凍らぬ隅に鴨鴉鳴ら寄り合う湯治客のごと

零下にも凍らぬ水辺にさまざまの鳥は来たれり争うことなく

夜明け前祈りに応えるように降る雨を見つめる大船渡の海

膝に乗せ旅せし歌の樂しかり思い出多きミチさんの猫（東ミチさんの飼猫の死に）

ガザの名を叫びて進む人々を見守る並木は炎の形

稲田 正康 東京

をさなごがわざわざ戻り父親に上衣を置きて遊具にゆけり
心配し降り口に立つふた親の居らぬ口へとをさながすべる

あきらかに兄弟の服着るをさな先に走つて母ひき回す

風つよき今日はいくらか年かさがすべり台占め駆けのぼりをり

責任額超え集めれば貴方のもの元からさうだつたではないか

問題とすべきは使途を書かぬこと誰が決めたかばかりをいへり

プーチンは今も「ソ連」のつもりなのか勝手に国境をひき直すとぞ

「線」をどう引かうと「ソ連邦」の中のことそのまま国となしたる障り

姉 川 素枝子 福岡

軟膏ぬりて治らぬ皮膚の炎症に年あらたまり立春となる

尿^{いはり}にてぬれし布団に寝てくれし母よみがへる今宵の涙

目交ひに来たる亡き人在る人と話しつつ眠りてをりぬ

見えぬとて嘆きし母の齢となり目医者眼鏡屋処置なしと言ふ

肥前太良に牡蠣くひに行くと言ふ息子よりそひ行けよ嫁の還暦

百歳を越ゆる翁が行き交ひに低き声にて死ぬなと言へり

お品書きのる睦月膳食材の高きを聞けば不足は言へず

花すぎて白髪^{しらが}になれる翁草めづらかと言ひしも一度のこと

慈しみてをりし種^{くさ}ぐさ庭さりぬ水泡^{みなぶ}の世とて嘆くならねど

妹ですと面会する日もはや無し病院の窓雪に閉ざさる
 病み衰へ肉の落ちたる兄の脚黄泉路の草鞋履かせ難しも
 体に気を付ける有りくるる兄の声残れる耳に炉の閉まる音
 兄が逝き甥と姪とも遠くなるそんな気がする焼香の順
 夫が逝き兄嫁が逝き兄が逝く乾くことなきわが泪壺
 除雪車のキャタビラの跡新しき凹凸踏みて生ごみを出す
 霜焼けの小指が疼き遠き日の悲しみ淡く思ひ出づる日
 肺心臓検査に病の兆し無し雲の隙間に冬の日差す
 航空便の残席見つ欲望の募りゆく血もはや無し

だしぬけに猪親子に出くはせば傘かざす方法は妙案と聞く
 家中が凍る如きの寒中に宅配牛乳の収納を数日忘る
 「春は名のみの風の寒さや」の歌を唱へて震へつつ御堂の掃除は短く終はる
 厄除けの行事に一人来る翁は媼の群れを離れて座る
 除雪せぬ空家増えをり歩道にて車のバックに積雪にはまる
 異常なる気象か逝きたる人の多くして逆縁多く名を聞き返す
 如月の雲のあひだより時をりに射す光に雪淡く舞ふ
 ローカル線のレールに落葉貼りつきて電車の速度を落としたると聞く
 空中に杉の花粉を撒き散らし響く夕べの風は募りぬ

三月号冬雷集評

山本 三男

今年は受賞者展にグループ展公募展もあり多忙な年に 赤間洋子
 染色の世界で第一線で活躍されている作者ですが、新たな目標に向かう意欲が感じられる作品です。次々と開催される展覧会の名称をあげて、多忙な年になることを楽しんでいくようです。

正月の休みに市の大通りは廃墟の如く 兼目 久
 静もりてある

現代の正月の光景が描かれています
 が、「廃墟の如く」という言葉が印象的です。
 正月は古くからの伝統的なハレの日ですが、日常は賑わう大通りが今は静まっていて、何かが失われている様です。

生きてゐるかぎりに私に幸せがふりくる様な空の青かな 富田真紀恵

この日の空は大変美しかったのでしょう。その美しさに、ふと、このような思いが浮かんだものと思われます。結びに「かな」という詠嘆の古語を使い一首を

締めています。

差しきたる初日のひかり移りゆく仏壇、
 神棚、柱時計へと 吉田綾子☆

下の句に詠まれた仏壇、神棚、柱時計などは新しい住宅では見られなくなりました。この家は古くからあり、祖先から受け継いできたものがあるのでしょう。ひかりが移っていく様に脈々と引き継がれている時間の移ろいを感じます。

デイサービス迎への車待たせぬやう九時十分に門前に立つ 橋本文子

九時十分というのは、デイサービスの迎いの車が来るのに余裕がある時刻なのでしょう。作者の他人に迷惑をかけないようにとの思いがよく出ています。

公園のベンチに見上ぐる高き蒼穹去年弟を今年妹 嶋田正之

大自然の雄大さとその中での人間のかなさを感じさせる見事な歌です。途中までの表現にした下の句に、余情があります。昨年亡くなった谷川俊太郎の「空の青さをみつめている」という詩のフレーズを思い出しました。

老齡の聖歌隊立つ吹きつける風に揺らがぬ熾火のように ブレイクあずさ☆
 最近では、木材を燃やして煮炊きをすることは少なくなり、熾火を見ることは稀になりました。この歌では熾火のイメージを老齡の聖歌隊に重ねています。毅然と立ち続ける聖歌隊の姿が浮かんできます。

葉包紙に種を包みて下だされしことの月見草に会はず季すぐ 姉川素枝子
 葉包紙に包んで貰った月見草の種は蒔かなかつたのでしょうか。移りゆく季節の変化のなかで、思いを果たせずむなしく時の過ぎて行ってしまった寂しさを暗示している歌だと思います。

温室に蟋蟀を飼ふ知人なり冬も西瓜を食む愚痴こぼす 井上楨子

蟋蟀の成虫は冬になると死んでしまうイメージがありました。温室で育てている人もいるのです。冬でも西瓜を食べると愚痴を言っていますが、作者はどんな思いでそれを聞いているのでしょうか。それを読者にゆだねています。

三月号作品一評

小林 芳枝

六ヶ所の氏神様に注連飾り鏡餅供え初詣する
吉田佐好子☆

初詣に行くのなら先に地元の神社にお参りしてからにするように母に言われたことを思い出す。氏神様は祖先の霊が祀られて居り最も身近な神である。それにしても六ヶ所とはすごい。吉田家の歴史の深さが感じられる。

今年、昭和百年我は九十まだまだ足を鍛え行くべし
松中賀代☆

今年、昭和百年から数えて丁度百年という区切りの年に当たるとだ。百年目を出発点として足を鍛え、元気で進もうという姿勢を学びたい。

みちのべの石の仏に近寄りて心で祈り「やあ」と歩み出す
鈴木やよい

道端にこうした仏があると自然に足が止まる。手を合わせて拝むというより心の中で頭を下げて通り過ぎる。それだけですっきりする思いが結句に表現されている。

三月号作品一評

藤田 夏見

海はいい見てゐるだけで 幾つもの溜まる用事は明日に回す
桜井美保子

見ているだけで海はいい。毎日の繰り返す事柄、予定も今は思わず。この歌に共感。帰宅後は自然に活力が湧きます。

表紙絵の桜の花の清しさよ律子さんの絵と知りて親しも
斉藤トミ子☆

今年、優しい桜の表紙絵です。作者を知る人達の少し誇らしい思いを代弁するような歌ですね。大会でお目にかかった姿を思い出しています。

娘達どこへ繰り出すの頭にはサンタの帽子ありトナカイの角あり
林美智子☆

賑やかな女子高生のクリスマスの集い。孫の友人五人に宿を提供した祖母の楽しそうな笑顔が見え（サンタの帽子トナカイの角）で繰り出す少女が見える。若きらはグループホームの立ち上げの約束果たし二度目の初春
村上美江

素揚げにシタレをからめた田作りに娘は胡麻をさつと一振り
本郷歌子☆
娘さんと一緒にお節を作る一連の中の一、きびきびと動く若い力を得て楽しそう。連係プレイもうまくいっているように勢いがある。

元日の朝日に向かふ子の顔に夢あり元氣あり手のひら温し
村上美江
一緒に初日を拝みながら母は子の顔を見る。その表情が明るく生き生きしている時の安堵感、母の喜びは其処に尽きるのではないだろうか。繋いでいる手の温もりがじわりと伝わってくる。

半世紀それより長く運転し無事故なれども老いには勝てぬ
永光徳子☆
脚力が弱くなるこれからが必要になるのに車を手放さなければならぬ口惜しさ。まだ出来るのにも思いついて諦めて心を決めたようだが便利さと安全の計りは難しい。

花の苗うゑて華やぐ庭となる取り分け和むまでしこの色
戸部田とくえ
春が近づいたので花を植えて華やかに

新しいグループホームを立ち上げ二年目となった。約束を果しそして健闘をさしている新年早々の若者達へのエール。
新年について決心車を処分免許も返し自分も変える
永光徳子☆

新しい年に、車を処分。免許も返し自分も変える。いつか来る事と思っただけ。その決意表明。結句の自分も変えるに、今日が一番若い日と思う。何か作者の新しい挑戦の予感。
玄関の網戸を開く如き音聞こえく夫の帰る気のせり
稲津孝子

外の物音に玄関の網戸を開いて夫が帰って来る。そんな気持ちになったよ。ひとり居の作者。
豊作のユズを夫とマーマレードにけふの一日を和気あいあい
戸部田とくえ

たくさん実った柚子を夫と二人でマーマレードを作る和気藹々の一。手の甲に浮き出る血管さすりつつ何時しか労る限りなく
戸部田とくえ
しっかりと働いた証の血管の浮き出る手です。労いながらまだ働く尊い手です。

なつた庭を見ながらの感慨。多くの花の中で撫子の柔らかな色に心が和むという心境が上手く詠み込まれている。

自力では立てない犬が立ちたいと床叩きをり血の滲むまで
須藤紀子
老いて力の無くなったことを自覚できない愛犬が、何時ものように散歩に行くとして繰り返し立とうとする姿は見ている方も辛いだろう。しかし最後まで諦めることなく自力で動こうとする姿勢は命あるものの本能として尊い。

早朝の散歩を続け月の位置徐々に移るをこの頃気付く
山本三男☆
同じ時刻に同じ場所を散歩しながら月の位置が少しずつ変わること気付いた作者、宇宙の仕組みの中で自分自身の位置が見えてくるような思いがして心が広がってくるようだ。

youtube 眺めてあたり年末に旅や車窓の風景などを
中村哲也
休暇などでホッとする時は何処かに行ってみたいなと思う。現実には叶わない事を楽しんで心を遊ばせる作者に共感する。

知らぬ間に少年ら皆育ちたり広場に歓声聞かなくなりて
須藤紀子

幼馴染の少年達は集っては遊んでいた。だが中学生くらいになると自然と外遊びはなを潜めてしまうのだ。一、三句の皆育ちたりに作者は親しい少年のすがたや声のない事を寂しい思いと共に成長を喜んでいる。

ペンペン草が商品となり部屋飾る姿くづれず長生きしをり
佐藤靖子
都会の都心では、なんでも商品となるのだろう。作者の部屋で可憐な姿のままペンペン草は長い間を楽しませたのだろう。子供の頃ペンペン草で遊んだ記憶を持つ人も多い筈。風水では（元氣と活力の象徴）私は畑で摘んで来ました。

母とふたり雛を飾りし思ひ出はやくて淡き陽だまりのいろ
中島千加子
桃の節句に向けて雛飾りを母上とされた記憶。優しい言葉をかけながら一つひとつの雛を置いてゆく、母と会話をした柔らかな気持ちが淡いひだまりの色のよう

作品一

桜井 美保子 神奈川

雨か雪降つてきさうな冷ゆる街こんな日にもある行きたいところ
ちよつと散歩に出かけてきます寒き午後バスと電車で半時間ほど
チューリップの球根芽吹き公園の花壇に整然と小さきみどり
年を取り好きになりたるクリスマスローズ色さまざまの中の黄の花
はしけといふ小船に暮す人ありき嘗て運河の盛んなりし頃
陸から船へ歩み板渡る少年のぐらつかぬ足 運河展の写真
船上に炊事する主婦の写真あり子を負ぶひ少し体かがめて
歩み板踏み外し落ちたる児の作文「海の中の十分間」読む

田端 五百子 岩手

来た来たと孤独と連れ立ちバスに乗る我より先に木枯しが乗る
時々厳しき余寒も見舞ひきて本物の春へじわり近づく
冬休み僅かな晴天二人して街角ピアノ弾くと少女は
延焼の恐れ高いと寝入りばな孫出動す停電の町へ
五日経て今夜も炎ちろちろと山肌を這ふと消防士嘆く
稜線を焰はくねり走り飛ぶ類焼許すなど消防士らは

水を吐くホース担ぎて傾斜はふ消防士らの姿まぢかに見たり
真夜通しサイレン、ヘリの旋回音焦げたる臭ひ鼻を突き来る

正田 フミエ☆ 栃木

二月末トマト種まき発芽待つ温度保つに炬燵弱温
トマト種を発芽させんと三十度の加温保つに工夫を凝らす
トマト種は温度計見つつ炬燵のなか昼は窓辺の三十五度に
トマト種は三十度温度を保ちつつ七日目の朝に緑の発芽
七日かけ発芽をなせるトマト種なんといとしくお早うと言う
トマト種の発芽試み三年目苗に育てるわくわくとして

飯塚 澄子 東京

共に乗り入浴サービス受けむとす生涯医師を続けし人と
持参せる短歌の本を共に見る晶子・啄木親しむと笑む
大正の生まれと聞きて驚きぬ十四年とて百歳の今
帰り来て祝百歳の色紙書き次週渡さむ意気込む我は
孫二人祖母と七つの雛段にプリント見つつ雛並べをり
姉妹五人寺に育てど記憶なし雛飾りをば手伝ひしこと
小箱らは大箱に入れ押入れの襖もどせる小二の曾孫
恵里雛と名付けのありて初孫に贈りし我と嫁の語らひ

斉藤 トミ子☆ 栃木

海馬にも前頭葉にも異常なく脳に隙間の有らずと医師は（認知症検査）

青年はオーストラリア人軽装に龍王峽を弾んで歩く
 ジャパニーズとスマホに指示し画面見せ日光までの乗換えを聞く
 熱ありて食欲も無く伏しており寝て治す我れひたすらに寝る
 わが風邪を夫に移し快復す元氣になれば優しくできる
 サボりたるプールへ行けば友寄りて我れの安否を気遣いくるる
 尻尾振りジャンプに迫り来る犬とハグをする朝癒されており
 三月ぶりの血液検査異常なく何故になりしか脳梗塞に

高橋 燿 子☆ 埼玉

久しぶり賑わう広場の雑踏に師と友探す待ち合わす駅
 友が驚くナウい師と歌会の骨組決まり待たれる四月
 姪の荷はフキノトウ五個青菜二把手作り蒔蒔早春かおる
 それぞれに過ぎし日瞼に浮かべつつ友と吾と雛段の前
 念願の医学部合格嬉しくて部屋飛び回る由奈のよろこび
 合格の明るき声に「翔太おめでとう」あふれる思い
 田を起すトラクターを群れて追う鴉、棕鳥、鵲もいて

浜田 はるみ☆ 埼玉

屋内に居ること増えて高尾山晩秋の日の眺め思い出す
 寒波が長く居座り降雪が毎日続く日本海側
 例年の三倍という積雪に終日雪かきせねばならぬと
 万札の価値が少なくなりて尚とどまりの無い値上げ続きぬ

幼馴染いるのはいいねと息子言い転勤族の憂い今更
 大船渡に冬雷会員住みていて森林火災は人事ならず
 ロシアとウクライナの停戦は予想を越えて方向見えぬ

野崎 礼 子☆ 埼玉

3・11震災より十四年鎮魂の祈り捧げる青空に
 嬉しいこと続けてありし一週間冬の青空高く澄み渡る
 合格に安堵の胸を撫で下ろす十八の瞳希望に満ち溢れ
 短歌までAIで作る時代なり悩みつつ詠む歌にかなうのか
 友四人話があちこち飛んで行く喋って笑ってストレス解消
 ねえわかる？ 思い出せない漢字一つスマホは見ないぞ友とにらめっこ
 一晩に家も車も雪の中やがて来る春を姉は待ちおり

田中 祐 子☆ 埼玉

転た寝のほんの僅かに夢を見て家族総出の何故か餅搗き
 地区内の夜半の大火事におののきて二日後道路の陥没発生
 寒風に冷え込む夕べ避難する家族増したるをラジオにて聞く
 難病の痛みに堪える義妹の声のトーンが今日は和らぐ
 難病の治療はすべて済みたるとこれから述べる義妹の笑み
 近く住む義妹も独り事あらば寄り添い助け合いての日々か

倉浪 ゆみ 埼玉

新しき市長は若き女性なり期待してます支援もします

水仙を好みし叔母の供花にす数へつつ切るていねいに切る
何ごともプラス志向の友がゐて首肯きながらの会話はつづく
末の孫受験生なり来る年はお守りわたせば笑顔が返る
年賀状とだえし友のこと想ふ寒き夕べよ木枯しのふく
桜木の幹には青白き苔ありて堤の並木春を待ちゐる

追憶

岩 淵 綾 子 岩手

二月五日夫の三十三回忌にて子らの電話に心が和む
法要は二年前に済ませどもあの日偲べば血圧あがる
震災後「歳とらん塾」に参加しぬ岩手の被災者迎へてくるる
佐倉市の「ユーカリが丘」の懐かしも避難生活八ヶ月の地
唯一人「モノレール」に乗り福祉の里に社協の人ら皆優しかり
上志津の優しき友に出会ひたり避難せし吾に手を差しのべぬ
知らぬ地で眼科に内科歯科医にと付添ひなしに行けば皆優し
乾き切った木にも草にも雨降りてあたり静かに沁み込みてゆく
戸開くれば朝もや立ちてしつとりと穏やかな春のふいの訪れ
畑中に屈みて葉レタスを採りゆけば赤紫の仏の座混じる
庭の松に番のハトが巢を作り枇杷の葉陰でヒヨドリを追う
柳青みこぶしの白がいち日で花の数増す今日十八度

林

美智子☆ 東京

飯 嶋 久 子☆ 茨城

抗がん剤治療今日にて終了す戻り来る娘に赤飯を炊く
度々の送迎の労とりくれし姉娘にも赤飯渡す
娘の快癒ラインに告げればたちまちに会わんのメール届きて嬉し
観梅に食事会にとわが手帳たちまち空白埋まり行くなり
三人は卒寿まぢかにひかえしが足腰元氣口も達者
偕楽園の梅の開花きく朝わが家の梅は満開となる
半年の空白埋める立ち姿もう大丈夫と夫に告げる

吉 田 佐好子☆ 茨城

落葉後チャコールグレイの枝の先ほんのり紅さす春の訪れ
雨降らず庭木の肌が乾燥し雪降り始めうるおい戻る
義母植えし梅の木夫と同じ歳異常気象で開花遅れる
水仙の葉が地面から見えだすと春は忘れず来ると確信
震災のあの日は決して忘れないその日のために用意始める
オール電化安全便利はよいけれど停電すると機能不全に
雨音が徐々に静かになるときは空から降る雪地につもるとき

松 中 賀 代☆ 高知

あけび棚に朝陽が差せば隣家の猫四匹が日向ぼこに来る
実が生るは三年先を店主言う吾れは構わず葡萄苗求む
吾が歳を言えば店主も勧めまい植える手順をうれしく習う
天候は降らず照らずに風もなく龍馬マラソン絶好日和

雄大な景色の続く桂浜無心に走る八千九百の人
風もなくマラソン日和に恵まれて沿線に立つ応援も頑張る
珍しく降り止まぬ雪友の住む家の巡りを暮しを想う

鈴木 やよい 東京

寒風の吹きくる先に星みつけ縮こまる肩が少しだけ緩む
Eテレでたまたま見たる能なれど字幕追ひつつ引き込まれゆく
能にみる静かな仕草それだけで狂女の悲しみ深く迫りくる
ダウンより抜けたる羽毛をつまみ上げ春めく風にふつと解き放つ
日々着たるダウンの袖口くすみきてそろそろ冬も終りに近し
四月並みと予報を聞きて家出れば白き服の人まぶしく歩む
霧雨に音もなく濡るる梅見上げ傘持たぬ吾も共に濡れをり

本郷 歌子☆ 栃木

飛行機は雲海の中を突き進み晴れゆけばついに沖縄の海
ハイビスカス・ブーゲンビリア沖縄の一月は今夏の気配に
航跡は白く長く残りたり大き船ゆくエメラルドグリーン^{ちゅうらうみ}の海
^{ちゅうらうみ}美海の水族館に飛び交うは声高に話す中国人の声
風船を上げて今朝の風を読み熱気球の競技始まる
熱気球の飛び始めたる暁の空の彼方に筑波嶺の立つ
冬の澱追い出すように胸広げ梅の香吸い込む筑波の梅林

村上 美江 岩手

甥の居る地元消防団員ら二度目の発災確^{しか}と防御す
窓ガラス震はせ響くヘリコプター大火の尾根へと絶え間なく飛ぶ
待ち侘びる雨雨雨よもつと降れカラカラ天氣が呆れるくらゐ
一週間燃えに燃えたる山火事に神が降りたり地上を潤す
遠近の山よりの煙風に乗り湾を越えてもきな臭いまま
ドジャーズの佐々木朗希とチームより山林火災の支援金届く
「自衛隊消防隊らが呼んだ雨」活動讃へた大見出しあり

伊澤 直子☆ 東京

若冲の升目描きの見られると観光がてら静岡に行く
十二万升一つ一つに色を乗せ立体的な厚みを感じ
絵の前に立てば力のせまり来て圧倒される「樹花鳥獸図屏風」
日本平裾野に霞たなびいて白嶺の富士は空に浮かびぬ
久能山東照宮を見てみた古き石の階段登る
郷土の森北風冷たく身に射して梅見そこそこ室内に入る（府中）
室内のプラネタリウムの入口は入場待つ人長く列なす

乾 義江☆ 茨城

吹く風に埃舞い飛ぶ道行けば我が自転車に目の開けられず
局員の封書もつ我に明日届くと復活果たすか郵便遅配
故郷にさぞかし雪がと尋ねれば然程にあらずと聞きて安堵す
故郷の幾つもの棟の気になりぬ兄嫁施設に甥は京都に

何回か行きし袋田の滝の水いて滝となりて風情の変わる
吹き荒ぶ春一番に被害多々過去にこれ程の強風ありや
名優の西田敏行旅立ちぬ哀悼の言葉涙のなかに

永 光 徳 子 ☆ 東京

四ヶ月地中で耐えたチューリップ目覚めた今日は春の雪舞う
雪に映え小さな緑は十六個明日は晴れるとそつと教える
満開の梅に重たき春の雪積もりて溶けて積もりて落ちる
小雪舞う電線に並ぶ小鳥達互いに頭の雪を啄む
側溝に雪溶けの水流れ込み赤白梅の花筏行く

久々の春の陽ざしの眩しさに頬被りしてペチュニア植える
ポストには老人ホームや墓地案内塗装に買い取り喧しきかな

稲 津 孝 子 福岡

暗くなる雨戸を閉むる彼方にて踏切聞こゆ哀しからずや

「行蔵は我に存す毀誉は他人の主張」夫のシールはがれてきたる
動けざる我に代はりて正月の飾り夫が飾りたる夢

夜ふけて聞こえてきたるアイネクライネ・ナハトムジク夫好みき
あらたしき年の初めの箱根路を走る選手に銀杏の落葉

正月の一日二日暖かく梅の蕾の萼われてきつ

長谷寺の除夜の鐘きくテレヴィにて聞けば願ひの叶ふといへり

戸部田 とくえ 福岡

庭に咲く淡きピンクの八重椿バラと見紛ふほどの優美さ

朝の月みあげて明日は満月と見直す空に雲のかかりぬ

押されつつ商店街を歩きつつ姿勢正しぬいつとはなしに

細々と営む花屋の閉店のお知らせ文字を読み直しをり

町内のもちつき手伝ひ帰りにはみやげに貰ふ草の香のあんこ

山吹の一重の黄色いつしに枯れてしまひぬ白ともなひて

念願の吉野の桜の計画を叶へてくるる息子の電話

大 塚 照 美 兵庫

「冬雷」の表紙絵の桜ほんのりとうすき赤みは春を待つ心地

姑様の白衣のすがた目に浮かぶ代診とふけさ医師は女性にて

剪定せしシルバーさんが二箇月後「約束の新若布」と玄関先に

美容院廃業ののち逝かれたる先生の「金の成る木」今わが許に

追ひ越され追ひ越されても杖のわれ前傾姿勢にはならぬと歩く

黄泉路にてきつとわたしを見つけてと頭をば下ぐ写真の夫に

灰色の雲ひろがりて忽ちに雪降りしきる通院途上

吉 村 昌 子 千葉

朝六時千葉出発し孫と息子二人で運転わがふる里へ

東名の静岡通るとすぐ富士がほんのり雪をのせて見えたり

わが生まれしこの家屋敷さら地とするを思いて写真とりたり

仏壇と屋敷の掛軸弟が持ち帰りたると電話が来たり

神戸タワー京都タワーを横に見て速度早める雪降り始めて
その靴に花びら乗せて桜散る中を歩けり夫と並び
友達と桜並木の中を行く空の明るさ花のあかるさ

光り降るごと

松本英夫 東京

聞こえ来るキンコンカンはビッグベンベルに急かれし吾の小学校
振り返る指揮者の合図にせきを切り手拍子おこるラデツキー行進曲
葉がぐれに鳴くはメジロかシジフカラ秋日さやかな公園の道
松間より月影のさし炬火四基あかくゆらぎて能はたけなは
境内の静まりのなか万作の立ち居ゆるがぬ留守居の酒盛り（狂言 樋の酒）
日の暮れて「ヤ、ヨイ、イヤー」掛け声の木立へ響き薪能燃ゆ
弦楽は静かに流れ笙一管光り降るごと「きよしこの夜」
葬送ののちはくつろぎ「英雄」のホルンの三重奏やはらかし

三好規子 神奈川

松林の合間に見ゆる濃き藍とエメラルド色の湘南の海
数年に一度の寒波といふ今日の湘南の海に数多のサーファー
山腹の大きなホテルの八階に孫と眺むる夕日の帯の海
幾度目かの箱根に泊まり初めてのガラスの森美術館に入る
日の光と風に耀ふ取りどりの色を楽しむクリスタルガラス
大涌谷の噴煙を背に電飾より美しクリスタルガラスの造形
同窓のその父に孫は京都より土産にレトルトの「総長カレー」

須藤紀子 埼玉

福寿草の花芽やうやく伸びたるを覆ひて重し里の初雪
カーテンを開ければ雀並びをり吾が撒く米を今かと待ちて
犬の部屋暫し覗きて通り過ぐかつて路上で出会ひし猫たち
食肉も卵も飼養の過酷さを知れば痛まし日々の食卓
原発を再び増やすと言はれても何も言はないこの国の民
三月の風強き日は思ひ出づセシウム浴びて捨てし茶のこと
良心とふ古き言葉のありしこと忘るる世界で政治が動く

佐藤靖子 東京

隣り街阿佐ヶ谷歩く雨のなか紅梅白梅よく散りにほふ
兄がきのふ死んだといふに連続のドラマに一喜わらひてゐるも
兄妹の三番目の死は次男の兄長兄と姉われに残りぬ
福島県中通り震度四の余波三〇〇キロ隔て背なが受け止む
きんぴらとこんぴら関係ありやなし無しと知りゐてつくる金平
まへを行く人に挨拶せる人の笑み消えぬままわれに向けらる
食卓の椅子に坐りてゐる犬が家族の箸の行き来を見をり

齋鹿ミヤコ 神奈川

買い物帰りに右折する角に屋根壁黒きケーキ屋建ちぬ
友達と喧嘩したのか庭すずめ今朝は一羽で来て去りゆけり
内向きと下向きの枝を剪定す剪定のポイントを検索しつつ

足台に昇れば届く枝を切る届かぬ枝はどうしたものか
何してるのと話しかけるやうになり向かひの幼妹の方
お向かひの引越しのあと生まれたる幼ひとりで自転車に乗る
すぐそばの電信柱わが家に倒れくること初めて思ふ

江 藤 ひさ子 大分

埼玉の女孫の結婚式に行く準備遅々と進まぬ九十三歳
頭寄せ夫と確認先づ祝儀、式服、常備薬と指を折りつつ
概ねは準備を終へて一段落後は只々体調管理

コロナにて組体操は没あとはおしやべり真向法体操

基本体操終へて始まるティータム唯ただおしやべり「頭の体操よネ」と

その葉先まこと金魚に良く似たる金魚椿が丈高く咲く

側に立ち見上げるも良し窓越しに眺めるも良し金魚椿の赤

朝刊を先づ開くのはお悔やみ欄知り合ひ無くて安堵すけふも

鈴 木 計 子 東京

舞鶴の海を見渡す丘に建つ白く明かるし引揚記念館は

収容所再現したる暗き部屋置かるる人に父が重なる

極寒の地にての抑留数年を生きにし父を思ふ今にして

舞鶴の引揚記念館に行きたる夜眠り来ぬまま朝となりぬ

兄と姉五つと三つわれ半年母二十五なり父の出征

裸木を過ぎゆく風が前に立つ豫報士のマフラー揺らしてやまず

三月の気温といへる大寒の日差しに歩く歩きたきまま
指やせてまはる指輪の抜け落ちることなし節の太くなりゐて

山 本 三 男☆ 群馬

ぜんそくは九月以降は治まりてのど飴なめるは稀になりたり

「鹿居る」の声聞き見れば河原行く鹿三頭はいずれも若き

若者は河原を走る鹿を見て興奮気味に声を上げたり

赤城より迷い来たるかこの街は鹿など住める所ではなし

白髪の老人われは頭たれ待合室に呼ばるるを待つ

わがために深夜を灯す病室にナース二人と医師来るを待つ

夏越しのわがシクラメン三月になりてようやく花茎の伸びる

散歩路に菜の花はもう咲きており考え止めて土手見渡せば

中 村 哲 也 宮城

総務より年内休暇の取得義務二日足りぬと催促される

用も無きながらに休めの催促に支障無き日を巡らし探す

忘年会絶え浴場に浸る事久しく無ければ行かむと決める

大浴場有りたるビジネスホテルでも一泊するかとネットに探す

平日のバス停留所のひと群に母校大学卒業式を知る

赤緑紫色の羽織見え常とは異なる華やぎに会ふ

人一人姿の見えぬ大浴場独り湯舟を独占したり

屋内のぬるき湯舟に飽き足らず露天の熱き湯舟に浸かる

込み上ぐる咳に耐へつつひたすらに医院の開く月曜日待つ 本間志津子
医院が休みの日曜日に体調が悪くなつたようだ。とにかく月曜日まで待つしかない。早く診察してもらいたいと思ひながら必死に耐えている。そんな辛さと不安がよくわかる。

六人で囲みし広き食卓のひとりとなりて半分物置く 梶尾栄子

かつては六人の家族で食卓を囲んでいたのに、今は一人になってしまった。以前の賑やかさを思うにつけ一人の食卓の寂しさが深く感じられるのだろう。しかしユーモアのある結句にほっとする。作者の強い気持を感じる。

もう一度ゴルフに挑むと友からの誘ひの電話を拒めず素振りす 大野 茜
作者自身もゴルフはあまりやらなくなっていたのかもしれない。それでも友の挑戦の気持に動かされたようだ。素振

りをして備える姿がほほえましい。思いがけず大人数の元旦に重箱一段増やす喜び 川俣美治子☆

想定外の来客があったのだろうか。賑やかな元旦になったようだ。急いで重箱を増やす作者の楽しげな様子が目に浮かぶ。すこやかに迎へたる朝うす味に作りたるお節で新年祝ふ 松居光子

お節といえは濃い味付けが多いが、作者は「うす味」に作ったお節を用意している。健康を気遣つてのことだろう。すこやかに迎へたお正月がよく表れている。

「情け無い菓子袋さへ開けられぬ」と夫は指先見つめ 津田美知子
病によつて指先の自由がきかなくなつてしまったご主人。自分ではどうにもならないもどかしさがこの言葉に強く表れている。そばにいる作者も辛いと思うが、じっくり見守つてほしい。

街路樹の落ち葉掃きつつ来む冬は一人で迎ふるを思ひてあたり 野口秀子
これから来る冬は一人で迎へなくてはならない。淡々とした表現のなかに大切

な人を亡くされた寂しさと心細さが込められている。

公園の花壇に霜柱立ちぬ踏みたき誘惑押しとどめけり 片桐美穂子☆

霜柱をザクザクと踏みつぶしていくのは快感だ。子供の頃に思い切り踏んで遊んだことを思い出す。しかし花壇の霜柱ではそれもできず、誘惑を抑えている。気持がわかる。

凍て空に十六夜の月冴え冴えと明日は夫の退院の日なり 塚本節子☆

凍りつくような空に十六夜の月を見上げている作者。体は寒さに震えているかもしれない。しかし明日は退院と思うと、心の中は嬉しさに温かくなっているに違いない。

カレンダーと共に一年過ぐすなりワクワクする日の多く有りたし 金子八重子☆

真新しいカレンダーを前にこれからの一年を思っている。「ワクワクする日」を期待する前向きな心が読者にも伝わってくる。

五月集

本間 志津子 山形

望まざる最強寒波二度三度節分過ぎの列島襲ふ

日の差すと見えて雲間に北西の粉雪俄か吹雪く真昼間

このごろの米の高騰何故か米不足とも米隠しとも

大国の矜持と使命思はぬか損得のみ言ふ大統領は

如月の二十日を過ぎて北へ去る寒気ゆるみて日差しの戻る

ざくざくと半ば融けゆく雪を踏み日の差す道を歩むよろこび

一夜明け雪のなき道ありがたく台車にのせてゴミ出しに行く

冬枯れの野を遠ざかる幻を追ひゆくわれかいづくへ向かふ

益坂 順子 福岡

深深と冷え込む朝のアーリーナに日課の体操を励む仲間と

ウォーキング、ラヂオ体操をはる時「けふも済んだ」と笑ひ合ひたり

鉄棒にぶら下がるだけの一分間かじかむ指に呼気のぬくもり

庭畑の野菜に寒の容赦なく訪れたるか小松菜あはれ

少しだけ春の気配のする庭の草に小さき花の咲きをり

菜園に伸び伸び育ちたる分葱みどり眩しき雨上がる畑

出来合ひの惣菜並ぶ夕餉にも「ああ美味かつた」夫の一言
山小屋の予約取れたる報告をラインに受くる小雪舞ふ朝

山 本 述 子 神奈川

十日程遅れ咲き初むる桜なり待ちし甲斐あり見応へのあり
三十年経たる桜の貫禄は高台にても迫るものあり

雛寿司を桃の木ならぬ桜木の下に広げて雛節句とす（三月三日友達と）
幼き日段に飾りし雛の顔そのやさしさを今も忘れじ
読み聞かせ紙芝居あり手遊びも幼児釘づけ我らも共に（小学四年生企画）
日日通ふグランドゴルフ公園の満開の桜の応援を受く
野蒜摘み浅蜷と合せぬた仕立て春の味はひ懐かしみをり

卯 嶋 貴 子 ☆ 東京

音もなくしんと降る東京に今年初めて積もれる雪は

白梅が満開に咲き暖かい春風の中買物に出る

縁側で陽を浴びながら近隣の人とおしゃべり楽しむ今日は

満開となる白梅に取り残したる柚の実が彩り添える

川 上 美智子 ☆ 高知

甘き香を微かに通う風に乗せ今満開の白梅のはな

白梅にメジロ集いて喜びの声のひびけり里山の春

飛び移り細枝揺らし花散らし大忙しのメジロの集団

目の前の小枝に蜜吸う一羽のメジロそつと撫でたしこの今の時

湿りたる土の匂いに立ち止まる落ち葉の下に新芽の息吹

冬枯れて寂しき段畑彩りてホトケノザ咲くところどころに

カサカサと音の聞こえて藪の中ささ鳴きするも姿は見えず

加 藤 富 子 ☆ 栃木

緑内障の改善願いて旧き友三泊四日の手術を受ける

視野狭窄は一部残ると友は言う転倒リスクありよくよく注意と

コロナ禍の影響にて面会制限あり退院の日にケーキ差し入れす

役所よりの医療費利用の明細書忘れていたる受診数多あり

愛ちゃんのお別れ会にはシスターのベールの似合う長女も参加す

チョコ入りのバナナケーキ二切れ届く手作りの味に疲労回復す

ネットショッピング 松 居 光 子 ☆ 三重

セキュリティーの厳しくなりてネットでの買い物頼に難しくなる

3Dセキユアとふ語の解らずにカード会社へ問ひ合はせたり

骨折りて本人認証済ませるもまた躰きぬワнтаイムバスワード

再び電話かけ直し指示仰ぐメール開きて数字を見よと

五分以内に入力せねば消えるといふ八桁の数字インプットする

やうやくにカード決済終了しゆつくり味はふコーヒ一杯

安 川 敏 子 ☆ 埼玉

紅梅の甘い香まとう和服の娘まとめた髪のリボンがふわり

想像と違ってみえる師と再会不安もちつつ近づいてみる

打ち合わせに小さなカフェで声ひそめ二時間ねばりプランを煮つめる
災難はデイサービスでぶつかられ頭部打撲でCT検査す

三月で誕生日迎え喜びし直後に転倒救急車の中

季節来て演奏会の案内あり楽しく祝おう友は八十五歳

北は雪南は青天水仙は頭を下げて風の吹くまま

箱詰めで茨城の知人より干しいも届き好物と言う皆で分け合う

津田 美知子 岩手

冷凍の野菜をシチューに入れてをり物価高騰の私の味方

八人の大家族に嫁ぎ来て夫と二人の五十年後

取り残し庭に根を張る雑草の葉の枯れたるも芽吹きはじめる

百円ショップに寄ればたちまち一時間過ぎてしまひぬ慌てて帰る

山火事の自然の猛威に唾然とし何をどうするか考へられず

山火事の上空をヘリコプター数機飛ぶ徹夜の消防士寒波のなかで

赤黒く炎の伸びる山の火事夜空に向かひ鎮まれと祈る

松崎 みき子 岩手

山火事で大騒動の大船渡わが生まれし里に避難指示出る

一日を只々テレビの前に居り警報のサイレン絶え間なく鳴る

わが実家は映像の中に見つけられず部落名だけテロップ流る

避難先の老々介護の叔父夫婦肩寄せ合ひてパンを食べをり

乾燥と強風の中を消防車は連日長い列で漁村へ向かふ

立ちのぼる炎の山へヘリコプターは水運び格闘す今日で七日目

薄々と実家焼けずに残りゐると知れば吐き気の少し治まる

井上 鈴子 山形

雪壁に横穴空けて蠟燭を灯す薄暮を兄見てをらむ

頑張りて報はれぬことまた一つ夫の病のGFR値

スキー場に小さき二男を真ん中に長男の撮りたる写真を眺む

子らはスキーをパラレルターンに滑りたりボーゲンのみのわれを残して

毎年のスキーの楽しみ今遙か雪片付けるロシニョールの帽子で

寒波二つ過ぎたる今朝は粗目雪やうやう春の来る気あるらし

大雪は当たり年といふ山菜を話しつつ隣人と茶を飲みてをり

佐藤 幸子 山形

裸木に細氷まとふ残寒の朝の川面の光芒乱る

残雪のまだ嵩高き軒の下よろろ狸餌を探すや

手を振りと笑顔で向かふ手術室夫の背中が小さく見ゆる

胆嚢の摘出手術を終へた夫酸素マスクと尿管カテーテルつけて

麻酔より覚めた夫を襲ふガス充満腹腔鏡手術にありがちと言ふが

命の危機感じたと言ふ手術後の一夜の苦しみを耐へたる夫は

「あなたがお腹で育てたのよ」と夫に見せる梅干し大の胆嚢結石

トランプとゼレンスキーの口論を聞きつつ苦しブラックコーヒー

戦争を知らぬわれらも程無く八十永遠の平和を願ひ空見る

残響集

岩村 知康 長崎

メガソーラー用地に畑を借りたいと郷里の人の電話かけて来
面識のあらざる議員その名前評判などはよく聞きてゐき
わが畑の周囲は全て同意済み迫り来るとその言ひ様は
父の畑まはりの畑それぞれに農作なしゐし昭和の時代
郷里への足遠退きて居しゆゑに報道以外の情報のなし
資料など見ざりて電話一本で農地貸すことあり得ざるなり
わが畑パネル敷設の候補地になりゐることは思ひもよらず
緑なす島の野山がパネルにて覆はるる様見たくあらざり
父が逝き相続したる田畑は親戚の手で耕作されをり

平 りょう 神奈川

一列の大波として寄せきしが渚近くで白く崩れぬ
休日とは体操などを少しやり後は六腑に酒しみ込ます
やつと来た冷蔵庫まへに女房はドア開けしめ何回もする
飼ひ犬は決まつた道を行きたがり二往復して満足をする
風つよき岬の先に海堡みえその遠方に富士の霞める

レスビアンゲイは短歌を作るのかふとした疑問をかしくもある
秒針の音を聞きつつ一秒は割と長いと考へてゐつ

右耳の奥より変な音がする例へてみれば鼓膜うつ脈
公園にぞろぞろと園児らが一個分隊歩いてくるよ

羽田 孝輝 山形

大雪でビニールハウス潰されて雪間に覗く無残を見詰む
大雪でビニールハウス潰さるる悔み引きずり半月経ちぬ
ひと月前ハウス潰ししあの雪はどこに消えたか青空見上ぐ
彼岸前嵩を沈めて残る雪ビニールハウスは無残に埋もる
何事もなかつたやうに春來たるビニールハウスは無残に埋もる
猫二匹布団の中に入り来てごろごろ鳴くを聞いて眠りぬ
猫たちが縦列となりわれに添ひ布団の中に潜りくる朝

後藤 恭介 ☆ 茨城

蠟梅の満開の花朝あさに体操会に行く我を励ます
茨城の白鳥飛來の菅生沼その脇に建つ自然博物館
春寒し恐竜動く博物館生命の進化と標本展示す
異文化の交流残す陶磁器は東と西の往来映す
イヤホンで解説を聞き展示物の古き陶器の歴史を知りぬ
京都には真夏と真冬訪問し盆地の気温を肌で知りたり
春來たりやること数多なわが余生歌詠む事と再学習と

三月号作品二評

井上 萱子

山頂の広場に集ひて笑ひあふ新しき年のふるさとの山 益坂順子
元旦登山の様子だろうか。山頂、広場、集ひ、笑ひあふ、全部が新年らしい。めでたい広がりのある言葉。言外の明るい太陽までも見えるようだ。

秘めたるに一つ二つと零れててこの口元の軽きを恥ぢぬ 小林貞子
秘め事は自分のことか他人の事か。言うまいと思っていたが一言言ったら次々出てしまった後悔を、「この口元の軽きを恥ぢぬ」と結んだ。人間らしい一面。
山清水青竹の樋を通り抜け池に流るる音清清し 山本述子
山清水、青竹の樋で清々しさを十分に表現。前作から初詣の様子かもしれないが、新年の張り詰めた空気感も伝わる。
街路樹の落ち葉に帰る土がない風に吹かれて邪魔者扱ひ 植松千恵子
落葉は本来土にかえる物だが、隙間な

く舗装された道路では、風が吹けば吹き溜るしかない。人間が作った道路なのに、人間に邪魔者扱いされている皮肉を含む。冬至の日庭に取れたる柚の実を挽いで洗って風呂に入れたり 卯嶋貴子☆
「挽いで洗って」という丁寧な表現に、庭でとれた柚への愛着が感じられる。芯から温まるゆず湯であっただろう。

注文の「ニラレバ定食」という言葉セリフの如く低く響きぬ 永野雅子☆
前後の作で俳優の市村正親氏のこととわかる。「セリフの如く低く響きぬ」いかにも俳優の言葉らしいところを捉えた。
風騒ぐ林道歩めば突風につば広帽子さらわれてゆく 川上美智子☆
散策か登山か心地よいはずの林道も、風の日は帽子も飛ばされる。帽子がさらわれるというのが、突風の強さを表す。
年寄るも友の呼びくれる「そばの会」大盛りそばを食べてしまいぬ 児玉孝子☆
年をとつてもそばの会に呼んでくれた事が嬉しかったのと、好物のそばかもしれ

れないが、大盛りを食べてしまったという、微笑ましい光景が詠まれた。
初売りに袋をたくさん抱え込み満面笑みのアウトレットの客 安川敏子☆
アウトレットの店はそもそも安いのに、初売りはさらにお得なのだ。袋をたくさん抱え込みに、その状況が表れる。
純毛の靴下擦り切れ繕へば素足に窓越しの陽のあたかし 松崎みき子
純毛の靴下には懐かしい響きがある。窓越しの日差しには春の兆しがあるのだろうか。生活の中に二つの季節がある。

父親と背丈の並ぶ十四歳二人の会話は二人の世界 西村邦子
父親と同じ背丈になったのは孫だろう。息子と孫と男同士の会話をしているところに、成長を見ている。
夕つ日をあびる河原の枯芒風立ちくれば琥珀色になびく 佐藤幸子
夕日をあびて琥珀色になびく芒の河原。季節と風景をしっかりと捉えた写生歌となっている。一ときの輝く景色も、雪く前の瞬時の華やきと見るとさびしい。

三月号作品二評

江波戸愛子

昨今は不要の品の買取りを謳ふちらしの多くなりたり 益坂順子
領きながら読ませていただいた。ちらしだけでなく家を回っている業者もいる以前に使わなくなったプレイヤーなどを買い取ってもらったことがある。後期高齢者の多い昨今このちらしの利用も増えていくのではないだろうか。買い取りを装う業者もいるらしい。

地謡と囃子はうねるごと響き翁の舞の厳かなりし 小林貞子
黒川村へゆき黒川能をみて詠まれた一首、上の句のうねるごと響きに地謡の声と囃子の音が聞こえ、下の句の厳かなりしに舞の姿がうかび作者の感動が伝わる。抱きゆく猫をなでくれて「心臓肥大症です」太き注射うつ 東 ミチ
具合の悪い猫を診た獣医はその猫をなでながら病名を告げてくれた。結句は血栓予防だろうか、獣医への感謝が伝わる。

今年こそランドゴルフ少しでも上達したく張り切る初日 山本述子
ランドゴルフの会員さんは多くチームも増えているようだ。町会の春のレクレーションの種目にも入っているがとても難しいと感じている。作者の上達を目指す姿勢が素晴らしい。
街角で日本人かと思ひきやおしやべりで知る外つ国の 植松千恵子
最近の外見ではわからない外国の方が多くいる。日本語の上手な方も多いのだと同じ国の方とは母国語が話しやすいのだろう。街角での驚きを詠んでこれから日本を憂う。

歌の友と過ごしし宿は既に無く鉄を入れる簡保の宿のカード 川上美智子☆
以前に冬雷の友たちと簡保の宿に泊まって詠んだのしそうな歌があった。その楽しかった思い出のつまった宿がなくなってしまうその時のことを懐かしく思い出しながらその宿のカードに鉄をいれなければならない作者の寂しさが伝わってきます。

自家製の野菜に小さき椎茸も加えて煮込む牡蠣のみそ鍋 藤田夏見☆
この野菜も椎茸も自分で育てたもので作者のお住まいの広島は牡蠣の産地でもある、お味噌も手作りの歌があり味噌鍋を食べているご家族の笑顔が浮かぶ。
年寄るも友の呼びくれる「そばの会」大盛りそばを食べてしまいぬ 児玉孝子☆
いくつになつても食欲旺盛なのは元気な証とおもう。そばの会の蕎麦は格別に美味しかったのがよく判る。

「ひるのいこい」聞きながら外商の夫は心なごむと言う 谷田律子☆
この番組は視聴者からの季節のたよりを朗読するがその声に便りに顧客まわりをしているご主人は癒されるのだろう。
今年採れの玉葱の芽が伸びきたり異常気象の影響ここにも 佐藤幸子
農作業をされている作者にとって気象の異常は作物に影響が出て大変なようだ。今年を買ったばかりの玉葱に芽が出た。そしてその芽が食べられることを知った。

三月号作品三評

桜井美保子

持つだけに意味持つ本のあつてよしの羅語辞典その一冊 新井光雄☆
今は使わなくても、かつては興味を持った羅語辞典。一連の歌にはラテン語に関わる様々なエピソードがある。その一冊を持っていることが自分にとっては意味があると。作者独特の作品世界。

明けやらぬ異国の街に出て行く息子実
験用の鼠の餌時 奥山清子

医学を研究している息子さんにとって実験用の鼠の世話も大事な仕事なのだ。まだ家族が寝ている夜明け前に出掛けて行く。研究への理解と労いを込めた作者の温かい視線がある。

冬至湯に母のおもかげ偲びたり寒き空
には蒼き月光 山崎 猛☆

冬至の日の柚子湯に入ると風邪を引かないそうだ。毎年柚子湯を準備してくれた母をしみじみと偲んでいる。その寒い晩の月光が遠い日の母を思い出させる。

三月号作品三評

橘 美千代

ドクタイイエロー控えめな姿を見せて
居りお役御免は吾に重なる 山崎 猛☆

黄色い車体からドクタイイエローと呼ばれるが正式名称は「新幹線電気軌道総合試験車」という。東海道新幹線や山陽新幹線区間を実際に走行して検測していた。一月に老朽化のため走行終了となった。鉄道ファンの間では「見ると幸せになれる」とされていたが、東日本の筆者は見たことがなかった。愛称が印象的であり心惹かれた。下の句自虐的であるが、ドクタイイエローに親近感を覚えておられるのか。地道に誠実に務め上げてこられた作者像がたち上る。

尋ねくる人のなきまま静かなる日暮れ
となりぬ雨の降りをり 佐々木政子
昼暗くなりて時雨の来るらしき遠雷あれば干し物入れぬ 同
やわらかく心を鎮めてくれる歌。流れ

広告の裏の白きをメモにせし若き日のくせ今に続きぬ 佐々木政子
両面印刷の広告もあるが、片側だけの印刷なら裏はメモとして利用する。そのことを若い時からの「くせ」であると慎重に表現している。ものを大事にする精神はいつまでも揺るがないのだ。

老化との競い合いかと心してよろめき
躓き今日も散歩す 立石節子☆
老化は自然のことで止められないが、「競い合いか」とユーモアたっぷりに詠んでいる。歩道なども凹凸があるところがある。転倒に気をつけて散歩を楽しんでほしい。

新鮮で安価な野菜を買ふために郵便局
に来る人居りと聞く 井出裕子
郵便局の利用者を増やすための対策なのだろうか。野菜が値上がりしている昨今、新鮮で安価であるなら郵便の用事はなくても買いに来る人もあるのだろう。現代の一場面を切り取った。

二人してゆく年くる年見入る夜妻がぼつ
りと「誕生日おめでとう」 羽田孝輝

るようなリズムが心地良い。孤独であるが作者は受け入れ楽しんでるようでもある。「静かなる」に導かれる下の句に詩情漂い結句が余韻を醸す。

次の歌も穏やかで整った調べだ。上の句と下の句が自然に繋がり響き合う。結句に作者の日常が読まれ印象を深める。

老化との競い合いかと心してよろめき
躓き今日も散歩す 立石節子☆

前向きな姿勢に好感を覚える。三句目「心して」が上の句と下の句を繋ぐかなめとなる。無駄な言葉が一切なくて巧みである。たたみかけるような下の句が作者の歩行のリズムを刻むかのようだ。

CDを聞きつつ粉舞う厨にて子等待つ
クッキーラカント試す 高藤朱美☆
「ラカント」の響きに惹かれた。ウリ

科の植物「羅漢果」とトウモロコシ由来のブドウ糖を発酵させて作られるカロリーゼロの甘味料だとか。これを使ったクッキーを作者はどうやら初めて作られたようだ。良い匂いが漂っているのだろう。この雪め降りても降りても降り止まぬ

年末の用事を終えてほっとしている時には自分の誕生日のことなど思っていないのかもしれない。妻からの思いがけないお祝いの言葉は嬉しいものだろう。心の通い合う二人の様子が微笑ましい。

ボンボンと七つの鐘の古時計正月の床
に心地よく聴く 越澤太朗☆
軽快な鐘の音で時を告げる古時計。暮しに溶け込んだその音は心を和やかにする。新しい年の正月の気分が時計の音と共に明るく詠まれている。

落葉舞う公園のベンチで小休止防犯会
のシニア三名 後藤恭介☆
街の防犯のために巡回している。こうした役目もシニアが担当。しばし休憩するひと時を歯切れ良いリズムで生き生きと表現。結句「三名」が効いている。

巨大なる豪華客船は栈橋の先から元ま
で船体である 平 りょう
栈橋に着岸した豪華客船。その船体と栈橋の長さはほぼ同じという驚き。「栈橋の先から元まで」が捉えどころ。読者にも船体の映像が見えるようである。

搔きても搔きてもすぐまた積もる

雪深い地ならではの実感のこもった生活詠である。「降りても」と「搔きても」を畳みかけて絶え間なく大量に降りくる雪の様を表現しているようだ。急な大雪で、地上を埋め尽くすどこにも遣りようのない雪の量は驚異である。

春野菜収穫ま近の春菊に新芽勢う緑濃
くして 越澤太朗☆

いつも農業の遊びを歌い読者の心を豊かに満たして下さる。春野菜の収穫を待つ期待と昂りが伝わる。下の句の写実が良い。結句言い差したが印象鮮やかだ。

四十を過ぎた息子が突然に結婚したと
メールを寄こす 平 りょう

メールで「突然に」結婚の報告をしてこられた息子さん。付かず離れず適度な距離を保った間柄なのだろう。軽く詠んでおられるが内心は安心し嬉しいのではないだろうか。ああ伴侶となる人がいてくれたのだと。筆者の場合いきなり「一緒に住むから家を出る」と告げられた。

作品二

小林 芳枝 東京

出発は少し遅れると午前五時過ぎて孫よりメールが届く
十五人乗りレンタカーに行く十二人始発は白鳥四人と私
術後放射線完了したる義姉がくる小走りに車道横切りながら
早朝の首都高速は忽ちに過ぎてしづかな明け方の海
推定樹齢二千年とある柏檜の幹に洞あり枝に葉のあり
白濱神社に参りたるのち海に向く赤き鳥居の立つ岩をゆく
ゆるやかな波の運びてくる水泡沙に吸はれて沈みゆきたり

布佐を歩く会

石 渡 静 夫 茨城

布佐駅の北口通に人は無くシャッター閉まる嘗てのスーパー
利根川の河岸で栄えた布佐の町街道沿ひの屋敷は広く
県境の利根川に架かる栄橋歩くわれらに筑波風が
江戸時代に代々名主の井上家往時を伝へる母屋の唐破風
玄関に展示されたる長持の三葉葵の家紋は光る
手賀沼の干拓事業はいくたびも洪水に遭ひき壊滅的な
三百年先人の遺志を引継ぎて干拓成りき戦後の昭和

干拓地を見下すやうに高層のマンション建てり春の日浴びて
犬猫を飼はぬ我家の庭先を大きな猫はゆつくり歩く

東 ミ チ 青森

百均のソーラー式招き猫窓辺に幾年月を手招きしてる
テレビ観つつ吉田類さんと登りゆく今日は奈良県曾爾高原の原
居間に置くハイビスカスは姪の形見今年も枝々の蕾咲き初む
屋根の雪を近所が見あげ吾に言ふも受け流せるは年の功なり
猫死にてポツリポツリと片付けて家の中すつきり広くなりてさびしき
淋しさと眠れぬ真夜の気休めに中古品のミシン購ふ
会話の後に必ず「がんばらうね」と言ひ合ふ超高齢者同士のわれら

小林 貞子 山形

晴れやかに里帰りして孫夫婦連れくる風の息吹かぐはし
孫夫婦共に労り笑み交はす行く末長く守られてあれ
門構へ古き海辺の宿の席ささやかながら身内の宴
下は車庫上は住居のベランダの手摺を越えて屋根雪崩積む
軒下の三角山を削らむと行きつ戻りつ唸る除雪機
十三馬力が高きアーチに飛ばす雪背丈に開く切通しの道
堅雪を踏みて杜松の木伐り始む一思ひにと決意固めて
枝打たれ立ち丸木となる杜松の木を上より二尺づつの玉切り
雑事の甘酒を汲む老い二人巳年の上巳めでたさ重ぬ

三月号 十首選

冬雷集 益坂 順子

少しまし程度の吾が認知症初期を励ま
すきのふまたけふ 大山敏夫
樹々の間に広がる海を絶景と見はるか
す感動こゑに出したり 櫻井一江
車待機の発熱外来駐車場に蕾膨らむヒ
メコブシ見ゆ 中村晴美
七草に小松菜採りて味はへり米子の朝
に冷え込みのなし 橋本文子
青きまま熟さぬままに又ひとつ歳を重
ね年改まる 天野克彦
生涯に初めて見たる初日の出感動伝へ
る言葉は知らず 大塚亮子
悠久の年を重ねて岩間より吹き出す量
の変はらぬ滝か 嶋田正之
左目の映す世界はセピア色やがては消
える懐かしき色 ブレイクあずさ☆
脊振嶺に向かひ心経唱へある一人の声
をひとりききつつ 姉川素枝子
起床五時まづ外を見て確かむる今朝降
り積もる雪の深さを 井上菅子

三月号 十首選

三月集／残響集 山口 嵩

冬の日を遮るごとき高気圧珠玉のやう
な今日の小春日 本間志津子
楽しきは冷えた身体を湯に浸しじわり
じわりと温まるとき 石渡静夫
賑やかな正月過ぎてまた二人静かな
日々が今年も続く 川俣美治子☆
食事後の二人の会話今日も又「珈琲い
れる」「お願いします」 小嶋知葉☆
『リバー・ランズ・スルー・イット』
のイットとは何なのだらう せせらぎ
聞こゆ 吉岡松世
新雪を施設の母に手渡せばサクッと掴
む笑みを浮かべて 津田美知子
街路樹の落ち葉掃きつつ来む冬は一人
で迎ふるを思ひてあたり 野口秀子
十二円ひと月の間に値上がりすポリ缶
二個はいつもと同じ 藤田英輔☆
年明けていよいよ寒に入るころの日脚
伸びゆくうれしさ一つ 岩村知康
部屋隅に断捨離せんと本積みて髪をショ
ー トにカットをしたる 塚本節子☆

植松 千恵子☆ 静岡

百歳の人に聞いてみたり人生で一番良かったことは何かと
最強の寒さにめげぬ藪椿厚く艶ある葉と紅い花

もちの木に蟬の抜け殻引っ付いておりぬ強風に落ちることなく
通り過ぎて野水仙の香り立つタンポポいっぱい春はもうすぐ
越して来て馴染まぬ人と思ひしが今朝挨拶され明るくなりぬ
媼らは終戦をそつと喜んだ非国民と言われたくなくて

早乙女 イチ☆ 栃木

壬生町を目差して行こう静かな日田畑を通りゆつくり走る
コストコの中は広くてゆつくりと見ながらまわる何買おうかな
買う物を考えながらあちこちと見ながら回る広すぎる店
帰り道弁当を買いこれでもいい夕食として帰宅するなり

児玉 孝子☆ 愛知

年寄れば脆き体になるばかり立ち上がらんとするに膝痛む
病院に娘とくれば痛む膝に五回の注射受けることとなる
恵方巻の太きを味わい家族等の支えのありて今日を喜ぶ
寒あやめ次ぎつぎ咲きくる一隅に陽の明るさを集め色牙ゆ
嫁の買ひ呉れしパジャマに袖通す新調の香に優しさつまる
夕食の支度をしつつ目眩して急のふらつきに椅子に捉まる
煮込みたるおでん鍋卓に皆揃ういただく今宵心温もる

藤田 夏見☆ 広島

松脂の雫溢れて美しき断面見するこの年輪は
斧に割る前の丸太に過ぎし日を聞いてみたいそれぞれの木の
薪を割る音聞きおれば弟の姉に勝りぬ力の強さ
溢れ出る松脂舐めて燃えゆらぐ炎に同化すわたしの鼓動
馬鈴薯を切り分け灰を被せおり白梅ひとつ綻ぶ庭に
種芋は四十グラムを目安とす芽を確かめて父と切りし日
人の息凍る舞台に舞う天女簪の津の風にそよぐ羽衣
さわさわと葉擦れの下に能楽堂硬く乾ける大鼓の音
面をつけくぐもることのなき声に秀吉公も能舞いたるや

草加の叔母

永野 雅子☆ 東京

年末に叔母の電話が無い事を心配しつつ賀状送りき
年明けの父三回忌法要に書留届く叔母の息子から
書留に同封された手紙読み叔母の骨折入院を知る
入院中の叔母に会おうと話し合い三月八日に面会申込む
自立歩行は無理となりたる叔母のこと心配しつつ帰る来たりぬ

川俣 美治子☆ 栃木

庭に敷く砂利に一輪のマーガレット十センチに満たず花咲きており
旅の本買い求め手に心躍る開く楽しめければ更に
寄りかかる孫の重さで実感す確かな成長十二歳の春

二月号 十首選

作品一 石渡 静夫

売れ残る松茸を嗅ぎ値札みて漢立ち去る
夕べの八百屋 田端五百子
長男が夫にかりわり杯を上ぐ声を合わせる
る楽しき集い 高橋燿子☆
自らの夢を信じて歩みゆくそんな未来
はきつと明るい 野崎礼子☆
わが家流それぞれの里でお正月これ又
楽し十八十色 岩淵綾子
初ごほり張つたと夫は吾に告ぐうれし
げな顔幼のやうな 倉浪ゆみ
娘達どこへ繰り出すの頭にはサンタの
帽子ありトナカイの角あり

林 美智子☆

元日の朝日に向かふ子の顔に夢あり元
気あり手のひら温し 村上美江
意志かたく前を見ている孫の弁の羨ま
しくあり若さと言うもの 乾 義江☆
手の甲に浮き出る血管さすりつつ何時
しか労る限りなく 戸部田とくえ
孫が言う「ぢいじとばあばの孫で良か
つた」誕生会で 吉村昌子

二月号 十首選

作品二 大塚 亮子

仏の座なづなすずしろ野の草を摘みて
今宵の粥となりたり 益坂順子
地謡と囃子はうねるごと響き翁の舞の
厳かなりし 小林貞子
柚子湯浴びはうたう鍋に舌鼓南瓜多目
の冬至の夕餉 山本述子
見逃したドラマ映画は寒中の炬燵に膝
を温めてゆつたり 藤田夏見☆
昆布巻きをつくると決めて用意なす今
年を最後と確と結びぬ 児玉孝子☆
初雪を被る春菊摘みてきて湯豆腐にす
る天婦羅にする 井上鈴子
鮮やかに大漁旗をなびかせて幾艘の船
が正月飾る 松崎みき子
初めての茶摘み体験手揉みして乾燥ひ
と月和紅茶届く 西村邦子
本棚の谷川さん訳『スイミー』と『ひ
とあしひとあし』読みつつ寂し
雪見障子上げれば庭は真白にて隣家に
続く猫の足跡 佐藤幸子

じじばの暮らしが急に華やかに孫との会話は脳トレに勝る
暗闇に雪は静かに降り始む電柱の明かり届く範囲に
雪被りビオラ寒々揺れている黄の花の咲く春が待たれる
穏やかな午後コーヒーと音楽と自然に春の歌口遊ぶ

梶尾栄子 兵庫

きさらぎの雨に打たるる南天の枝撓らせてふるふ赤き実
週一度脳と身体を鍛へむといそいと行く体操教室
すつぽりと帽子にマスク襟も立て用意周到歩きなむいざ
きさらぎの田の面にうつるわが影の折れ曲がりつつ畝に伸びる
不景気の今がチャンスと六〇〇トンプレス機購入を子は決断す
紅梅の徐徐に咲き初むどの枝も濃きより淡く移るさま見せ
高齢のわれ等なれども女子は女子女子会しましよ弾けてランチ
春の雨今日で三日を降り続く大船渡にこそ雨よ降れかし

水澤タカ子 山形

ノーベル平和賞の知らせに涙の蓑牧氏ともに喜ぶ高校生の大使
ノーベル賞を受くる日本の被団協へコープを通しいくばく寄附す
オスロより世界へ向けて順々と説く熙巳氏はも九十二歳
核のタブーゆるめてならじ今の世にボタン一つにて失ふ命を
わが町の原爆写真展に足竦む一瞬にして焼かれし人々
被曝者はわが市にも居り核廃絶を訴へ署名活動しをり

肩をくみ高く歌ひし若き日の「ああ許すまじ原爆を」を思ふ
雪吊りの満天星に積もる雪景色のどかに眺む平和なわが庭

大野茜 神奈川

施設にて高熱続きある娘案じて母も倒れたるといふ
友を見舞ひに来たる北海道久びさに会ひたる顔を見詰めて安堵す
見舞ひせる友に招かれ朝食を食べつつ眺む樽前山陵
フリージアの増えたる球根知り合ひに分ける土変はりても春に花咲け
新調の桐の小だんす届きゐて服を整理す妻張り切りて
ガーガーと轟音響くMRI脳の輪切り映るパソコン画面
案内に四時間待つ日も有ると言ふ医師に昼なし頭痛外来

藤田英輔☆ 高知

珈琲は遺品となりしカップにて深く溜まりぬ今朝も吾が手に
金色の固まりとなりのとなる蠟梅の咲く三月の道
ステージや出店の並ぶ陽の中に若き母の押すベビーカーの影
洗われて並び干されて吾がシャツにスタイ映りぬ風と陽受けて

野口秀子 山形

思ひ出す高校の時汽車通ひで一緒でありし大谷さんを
柔らかい人柄今も懐かしき東根市まで夜の汽車にて
髪長く伸ばしてゐたり和やかな司法教諭になったのだらう
きつちりと己の道を見つめつつ語りてくれし大切な人

二月号 十首選

作品三 天野克彦

持つだけに意味持つ本のあつてよしこの
羅語辞典そのの一冊 新井光雄☆
月に一度の歌会に行きて仲間より若さを貰ひ年の瀬迎ふ 奥山清子
冬至湯に母のおもかげ偲びたり寒き空には蒼き月光 山崎猛☆
広告の裏の白きをメモにせし若き日のくせ今に続きぬ 佐々木政子
老化との競い合いかと心してよろめき躓き今日も散歩す 立石節子☆
商品が賑やかに並ぶ郵便局町のコンビニと見紛ふばかり 井出祐子
二、三日話してゐないと用なくも電話をくれる姉の声聞く 羽田孝輝
初日出て「小野川」のながれ緩やかに霧立ち昇り紅に染まりぬ 越澤太郎☆
風吹きて枯葉の音にビクツとす暗闇の中のウォーキングに 首藤文江☆
裸木となつて小枝がよく見えるてつべん近くに鳥の巣が見え 平りょう

歌集 / 歌書 御礼

編集室・佐藤靖子

■青木陽子歌集

『転生』

令和七年二月五日発行の第六歌集、令和元年から六年までの作品三一九首を収めている。著者が移った新しい結社の代表外塚喬氏の帯文に『長年のしがらみを断ち切つて、新天地で水を得た青木陽子さんの…』と、『転生』というタイトルの説明とも言える文言がある。転生―生まれ変わる―一新か刷新か、何かすつと風のよぎる感がある。折おりの風景詠の潤い。

青苔にひとつ蝸牛のゆるゆると夕べ音なく庭濡らす雨

対岸を走る車の流体のごとく続きぬ夕暮るる路

人ふたり日がな一日黙しゐて剪定の松の夕べ整ふ

心理的と感じる歌。挙げてみた歌には「色」が出てきたのは偶然か。

和やかな家庭を築き上げたらう会いたいなこの年なれば
何時の間に音信不通のまま過ぎて今は何処に居られるのかな
思ひ出す六十年前あの夜の汽車の長椅子で話し込みしを

小嶋 知 葉☆ 茨城

わが街のフレンド会の催しは「柳亭左龍」の独演会なり
落語家の話芸のうまさ小気味よく江戸中期へと誘われゆく
待っていた春雨のあと地面にはイヌフグリ咲くそちに咲く
次々に開花してゆく椿ありピンクに白にしんがりは赤
体操を教えてくれる友ありてわが腰痛のうすらいでくる
平凡な二人の日々の彩りに喫茶店に来てブランチ味わう
「とむとむ」という名のカフェ客多く今日の珈琲ペルー産なり

西村 邦子 兵庫

新しい家族と対面孫たちは顔近づけぬ箱の開く時
歓声に包まれ子犬は尻尾ふる「初めまして」と小箱の中で
誕生の記念に植ゑたる桃の木は孫の名前の「百桃」にちなみて
年どしに桃の若木は育ちゆき孫は迎ふる成人式を
受験が終はりて久びさ出会ひたる孫は海外留学を言ふ
女の孫はステップを経て内定す望めるカナダのトロント大学
ステイ先に桜の切り絵のカード添え孫に持たせる縮緬風呂敷
留学の一人娘の旅立ち息子の子離れの一步なるらん

作品三

昼酒

新井 光 雄☆ 東京

日向ぼこ老いてこそ知る快楽なり膝に「冬雷」開き昼酒
日向ぼこ昼からなるもワイン呑むむろん少々それにチリ産
日向ぼこグラスの褐色スコッチよ我いま東京はるか時空を
日向ぼこ手には秋田の「高清水」むかし隣りに住みし酒蔵
日向ぼこ「カールスバーグ」のビールよしデンマークの雪思い出しつつ
日向ぼこビールに絡んだ思い出が「ハイネケン」社を一度取材す
日向ぼこ少しの酒も致命的あつさりウトウトすると寝入る
日向ぼこ酒を手にして西鶴の「男色大鑑」読めば眠れず
日向ぼこ酒は劇薬注意せんアル中必至と自制も必死

佐々木 政子 岩手

われは来て沈む心にかがみたり蒲公英の花春草に和む
窓の明かり今日暗ければ粉雪の降りゐてうつすら積りそめをり
われなりの分を守りて生きゆかむ老いゆく日々を大切に
久しぶりに電車に乗れば何故かしら哀愁覚え古里うかぶ
嫁ぎ先の家の廊下は檜にて姑が光らせわれまた磨きき
降る雪を見つつ偲べり幼き頃の雪橇遊び雪ダルマ作りを

晩秋の紅き落暉はわれの身をあか
あかと染めいづこに果てぬ
シリウスのあをき光に願ひたりわ
れの残生の清しくあれよ
ぬばたまの闇は黄泉へのオブリガー
ト広きわが家に独りの睡り
世情に耐えつつ。

地球儀に麦わら帽子かぶせたりを
ちこちの国に戦の絶えねば
潮風を切りて飛び交ふ鷗らのコロ
ナに遠き羽のかがよふ
天体を身に引き寄せて。

日に渴き月に潤ふ眼なり声に読み
つぐ「万葉集」を

「万葉集」閉ぢて深夜の窓に見る
冴えて傾く冬の北斗を

(朔日叢書第一二四篇 ながらみ書房刊)

■横山岩男著

『展望 栃木の歌壇』

令和六年十二月十二日発行。令和二
年から四年まで「国民文学」の代表で
あった氏は令和五年九月十七日九十歳
にて逝去。自分たちの結社のみならず、

郷土栃木県全体の歌界を見晴らすもの
である。以下に目次を挙げてみる。「評
論」・「研究」・「全国の歌壇 栃木県」・
「戦後の風土のうた40首抄」・ふるさと
文学散歩・「随筆」・「県歌壇時評」・「県
内文芸時評」以上。

批評の貧困、若い層への期待、各結
社の動向、出版された歌集からの抄出、
歌人クラブのこと等々。

「評論」の項目のなかにある「わた
しの好きな歌人の歌」という頁から一
人一首ずつ挙げてみる。

① 水すまし流にむかひさかのぼる汝
がいきほひよ微かなれども 斎藤茂吉

② 天地はすべて雨なりむらさきの花
びら垂れてかきつばた咲く 窪田空穂

③ 暁と夜とのさかひの少安に水をわ
たりて来る鳥のこゑ 松村英一

④ これやこの一期のいのち炎立せよ
と迫りし吾妹よ吾妹 吉野秀雄

⑤ 瓶にさす藤の花ぶさみじかければ
たたみの上にとどかざりけり 正岡子規

奥山清子 山形

午前二時群青色の空に星一つ温き床より窓を見詰むる
ソプラノリサイタル聴きて出づれば北東に白く冴えたる寒の満月
健康を親に謝しつつ祝ひたり姉九十六歳三月一日
東京の弟春を送り呉る黒土つきたる浅葱どつさり
更新の免許証手にわれ誓ふ「初心不可忘」八十八歳
運転は生きる縁の足であるバスも通はぬ白鷹町にて
表彰は平成二十九年なりき無事故無違反驕らず生きむ
義弟の一週間後にその妻の急なる訃報に身の縮みたり

高藤朱美 ☆ 茨城

晴れの日は鴨に会いたい数えたい歩くオオバシをそつと見守る
幸せが飛んで来る意のコチヨウラン友から届きぬ夫の命日
男物のコート羽織りて家の中だるまになりて夫を想う
不揃いなれど実りはうれし八朔の今年は四個黄に実りたり
五十年前の黒きベールを着けてゆく告別式の朝は温もる
幼児抱き散歩する家族とすれ違ふ今日は祭日孫を想いぬ
入院の教皇様へのお祈りをローマを旅する女孫に託す

塚本節子 ☆ 茨城

亡夫の時計仏前に供え二年間友と一緒に時を過ごし
亡き後も携帯電話解約せず友は夫にラインを送る
幼らの豆撒く声の聞こえねど吾等静かに豆を撒きたり

豆撒きて神棚に上げし小遣いを父に貰いき彼の日懐かし
大豆炒りやかんにしゅわしゅわ沸騰す母を偲びて福茶飲みたり
ほんのりと大豆の香り漂いぬ熱き福茶の喉に沁み入る
火の用心のタスキをかけたカエル像に春の嵐の吹き抜けゆきぬ
春一番嵐の如く吹きぬけてビル街の空黄に濁りおり

井出裕子 静岡

誘はれて来たる根津美術館見てまはる武家の茶道具重厚さ放つ
美術館の広き庭園の石畳巡れば深山に迷ひ込むごと
折々に蒐めたる器使はれず棚に収まるをすみずみ眺む
手放さむと思へど捨つるは忍びなく縁者に分かつを思ひ立ちぬ
珈琲好む兄に砥部焼き藍色のカップをひとつ選びて届けむ
大皿ふたつ料理の好きな兄嫁と一緒に届けむ笑顔を思ひて

立石節子 ☆ 東京

葬儀の日従妹の瞳やさしくて介護の辛さ偲ばれにけり
若き日の従妹の姿重ねたり葬儀の日には全て整う
紅梅の上下の枝にとまりつつ蜜吸うメジロ鴨忙し

山崎猛 ☆ 埼玉

赤彦の歌と重なる信濃路の湖畔の辺りの白樺寒し
諏訪の街は気象風土が適すのかハイテク企業が多く集まる
仕事にて急ぎよ訪ひたる上諏訪は長き春待つ赤彦思わる
偶然の3・11の黙とうにひとまえにして涙ぐむなり

⑥ ちる花はかずかぎりなしことごとく光をひきて谷にゆくかも

上田三四二

右にとりあげた歌に著者の言葉が添えてあるのを、断片的だが書いてみる。「歌の大きさは人の大きさ」「暁と夜…ある人が夜と読んだが、調べを大切にすれば夜と読むのがよい。その他読みについては、どこに休止を置くかによって意味が違ってくる」「短歌は意味で伝えるのではなく、調べで伝えます」「揺動を視覚のものとするか、それとも根本的な肉体的感覚とするか」等。ともすれば意味で伝え勝ちになり、読む者も意味に価値を置いてしまいがちということを改めて反省することになった。

(国民文学叢書第610篇 新星書房刊)

■横山岩男 遺稿集『奇跡の時』

大山 敏夫

令和五年九月に満九十歳で亡くなられた「国民文学」前代表の横山岩男氏の遺稿集。令和三年から五年までの

二七四首を収録し、折々の随筆数篇も収められている。題名は、

九十代は「奇跡の時」とわが呼びて生きむと思ふ生かさるるままという令和五年の作からとっている。

入院のたびに衰へゆくわれか九十代の生きがたくあり

ともその厳しい日常をうたうが、さし交はす枝の明るき花のみち花白白とわれをみちびく

のように美しい自然との交歓もあり、良き物を持てるは心を豊かにすドイツ製ルーベ長く手元に

と、みずからの来し方を振り返り、密かなる充実感にひたる姿にも納得。

若きより都市には住めぬと東京に片道三時間半の通勤したり

東京に通ひて今があるなりと遠距離通勤苦にはせざりき

令和三年の作。初志貫徹の力強さと努力の積み重ねを思わせ、人柄が滲み出ている。

金に困らぬ生活は借金(く)をせぬことと貧しき中の一つ思ひに
こういう考え方も堅実である。

早春賦聞きつつ諏訪湖の散策をすれば赤彦の歌の浮かびぬ
三泊の仕事無事終え帰路につく車窓の夕日まばゆく目にしむ
久しぶりに来たる散髪店頭にしばらく休業の張り紙のあり

金子 八重子 ☆ 千葉

最強の寒波に南天赤を増し福来たるかな正座の叶う
平穏なシフトに上司の名が入りその日に休みの希望増えたり
落花生畑の土を舞い上げて「やちぼこり」なる春の名物
大物は洗う覚悟が要る割に以外と薄いカバーとシート
警笛を「ファーン」と鳴らして黄の線の内に下がれとホームに響けり
「風の無いドライヤー」なるタオル買う「吸水速乾スポンジ」もある
頼りなく落ちては解ける春の雪彼岸参りに姪を誘いぬ
長生きは大変なのと先輩は筋トレ脳トレ心トレまでも

越 澤 太 朗 ☆ 茨城

去年より十日早く鶯の初音聴き春の野菜の堆肥漉き込む
市の祭りの協賛直売ほうれん草あつという間に品切れとなる
不織布を外し育てるほうれん草一氣に伸びて赤根たくまし
常連の客は注文のほうれん草「無農薬よね」と笑顔で受けとる
初乗りのトラクターは畑に薄煙吐いてグルグル回転しており
紋白蝶春一番の畑に来て菜の花なくても飛びまわりおり

首 藤 文 江 ☆ 埼玉

寒い朝やつと終わった水仕事日当たる窓に両手をかざす

早いものもう弥生かとしみじみと桜一面のカレンダー眺む
夕方の街に流れる「春の小川」雪がちらつく鉛色の空に
明日は雪と信じられない暖かさチョコアイス一つレジ籠に入れる

片 桐 美穂子 ☆ 神奈川

新部署に異動内定した我を庭のミモザがはじけて祝福
シーリングスタンプ風のシール貼り貴族の封印まねて郵送
推し活の父につきあい映画館角野隼斗のピアノに聞き入る
スクリーン見ながら居眠りする我に気づかず父は映画に集中
コンサートチケットとれぬピアニストなれど生で聞かせたい我
テレビでもいいよと父は遠慮するますますチケット手に入れたき我
世界的活躍をするスターたち凱旋すればチケット争奪
父角野息子は反田で我牛田推しピアニストがみな違いたり

永 井 享 子 ☆ 東京

春風は鳥のさえずりのせて来て耳にやさしく通りぬけゆく
寒い日の一時の陽は喜びをくれて心の温まりくる

サボテンの枯れた姿に反省す忙しく過ぎてしまった日々を
何もかも良くは出来ぬと思いつつこれで良いのか自問自答す

今 福 崎 子 ☆ 東京

あの世には親しい人々手を広げ我を待つなり極楽浄土（入院）
職員がカーテン開けて朝焼けの空を見させて我を上げます
やがて春外は白梅紅梅も今盛りなり元氣を出そう（ホーム入居）

二十代に読めぬ哲学書日日読める
までになりたり人に遅れて
二十代に理解できぬも理解力増し
たるならむ倦かずわが読む
漢詩を好み哲学書も愛読する。地道
に積み重ねて行こうとする精神が一本
通った生き方を貫かれた生涯であつ
た。心よりご冥福をお祈りしたい。
（国民文学叢書第615篇 新星書房刊）

歌集『明石の門』

松森邦昭著紹介

小林 芳枝

令和五年に刊行された『しゃれこう
べの歌』に続く第四歌集「前歌集から
一年余りということに少し驚いたが
五十年以上携わってきた医師という仕
事を離れて何かに熱中していたとい
う思いもあるのかもしれない。脳外科
医として多くの命を救い、五十三歳で
手術から退いてからは開業医として令
和五年二月まで活動され、医師として
の活動を終了しても人の命に直接関

わって来られた日々が体に沁み込んで
いるのだろう。そんなことを思いなが
ら読ませて戴いた。

恨みもち血にひそむ魂わきいでて
花となりおり一本の樹に

巻頭の歌。「花」というタイトルの
ある八首連作の一首目。故郷である明
石の家に祖父が植えたという桜の樹が
詠まれている。祖父が亡くなっても見
事に咲いていたという桜に寄せる思い
は何とも辛そうだ。この桜は震災で被
災した家と共に切られてしまったよう
で心の中に様々な交錯する思いも含ま
れているようにも感じられる。

次に歌集の最も大きなテーマといえ
る三十首。

縁ありて来院しおり医師として君
を診たのはぎらぎら夏日

脳腫瘍大きな影は転移巢 松果体
部が癌の本体

「亜兼君、手を握ってよ」「良く出
来た」一息つぐも次の難題

もう一本水を外へと流しつつ祈る
気持ちでコバルト始む

「歩けたぞ」リハ頑張るぬ亜兼君

体操も子供に戻ってはげみつ明日も元気で我が身としむ
今日もまたおいしい食事完食すこのくり返して生き続けるのか
長女来て気遣いくれぬこまごまとそのはげましに我が身はげます
これからは生活の事出来る様九十七歳の春何とかしよう

長谷川 剛 山形

豪雪に枝の裂けたる林檎の木剪定すれば鈍き音する
「無理するな」人は言ふけど目の前に積もるどか雪誰が処理する
雪原の小さき沼に白鳥が鴨と群れつつ旅立ちを待つ
那覇の空を切り裂くステルス戦闘機カメラを向けるは内地の人か
護佐丸が城壁積みし座喜味城アーチの門がいにしへ語る
夕暮れに柳葉魚を肴に酔ひをればうつが夢のごとき心地す
たまさかに友と出会ひて互ひの老いたる姿におもはず笑ふ

今 野 澄 子 山形

真夜中の静まり返るキッチンに待機ランプの点滅賑やか
名残り雪は多くありても雪解けを急かせるやうに陽の温かき
突然の友の訃報に「なぜ」と問ふ会はずに居たる無念さ残る
障子戸をそつと開けては雪を見る朝一番の私のルーティン
オーブン戦の快音響く映像にわが待望のシーズン到来
吹雪く中ハンドル握る手堅くなり「事故」といふ文字頭を過る
積る雪に春の光の眩しくて豪雪の苦を暫し忘るる
枝打ちの桜を花瓶に挿したれば芽の膨らみて開花の萌し

長 澤 千恵子☆ 山形

ボランティアで小学校の掃除する九十二名の児らを思いて
卒業式近き窓硝子磨きおり二月の風は未だ冷たく
児等の声響く校舎の掃除する何時しか心ほっこりとして
急激に雪解け進み落つる雪屋根の汚れも共に流して
大寒に汁粉つくりぬ家の内にほんのり甘き香り満たして

(☆印は新仮名遣い希望者です)

伸びしろ

桜井美保子

青砥駅待合室に本読めば二人連れ来て鳩も二羽来る
改札口抜けて笑顔に来る友らひと月ぶりの校正の朝
駅前にうまくタクシーひろへるか思つたとたん一台が来る
校正に集まる四人定位置に坐り手に持つ赤ボールペン
買ひたての眼鏡の力よ校正にけふはルーペを一度も使はず
駅に見る広告「苦手は伸びしろだ」老年われにも希望はあるか
千年も経ちて残れる言の葉を声揃へ読む源氏の講座
注釈にもあらぬ言葉はそのままに声いだし読むを第一として

「短歌往来」 令和七年三月号より転載

水雨降る日に母待つ家に
別れの日梅雨の合間の青空へ母は
飛ばしつ風船たかく

「風船」というタイトルの連作で
四十年前治療した十歳の少年を詠んだ
ものである。夏休みを与論島で遊び帰
京二日目に体調を崩した少年が重症の
大変難しい癌であったこと。できる限
りを尽くして回復はしたのだが五年後
に世を去ったことなどがリアルに詠ま
れている。この連作は昨年刊行された
昭和十九年会のアンソロジー『モン
キートレインに乗ってファイナル』に
も載っていて私などの日頃知る機会の
ない医師の心に感動し、深く敬服した
作品である。少年は卒業式に一斉に飛
ばず風船を自分の魂だと言って離さず
に持っていたという。亡くなった後に
空に飛ばした母、二人を五年余り見
守って来た著者、長い間多くの命に向
きあってきた中でどうしても心から離
れない大切なもので繋がれていたの
ではないだろうか。あとがきで「彼はま
だ私を見守ってくれているように思
います」と記している。

水と熱ありて地球にアミノ酸生れ
て蛋白ヒトへつながる

やわらかな光にゆれるコスモスに
かすかめまいて秋の野に酔う
この世にはもう縁のなき悪童が寄
りて球追う秋の日のなか

現在は手術から離れて旅行の歌、ゴ
ルフを楽しむ歌が多くなっているよう
でホッとする。

いずれ人みなみまかに助けんと
医のなりわいはまこと虚しき

本音のような、疲れているような一
首を上げて医師の素晴らしさをみせてく
れた歌集に感謝したい。

(二〇二四年十一月 ながらみ書房刊)

五月の川越歌会のお知らせ

第5土曜日の三十一日、午後一時
から五時まで。「川越」駅西口「徒
歩十分「ウエスタ川越」二階会議
室3号。定員十八名。会費500円
連絡先

高橋耀子 (049-231-8515)

安川敏子 (090-4608-7265)

第三十九回

全国短歌フォーラム



短歌と出会えるまち「塩尻」。
短歌で思いを表現する文化を大切にし、短歌のすばらしさを全国に発信しています。

題詠

※「音」の単語を詠み込まなくてもよい

投稿歌募集

申込締切 6月13日(金)

■応募規定 一人二首まで。自由題一首と題詠歌一首の合計二首(どちらか一首でも可)
題詠「音」

※投稿は自作未発表作品に限る

■投稿料 1,000円(高校生以下 500円)
※一人あたり、一首二首同額

■作品集代 1,000円(希望される方は投稿時にご注文下さい。)

■応募方法 所定の投稿用紙が400字詰め原稿用紙の右半分に作品・左半分に住所・氏名・電話番号を記入し送付ください。

ホームページの応募フォームからも投稿できます。

<https://tanka.shiojiri.com>

※ご連絡くださいれば募集要項(投稿用紙)をお送りいたします。

■払込方法 定額小為替(郵便局で購入)を投稿歌に同封するか郵便局備付払込取扱票で「口座番号00560-6-83649 全国短歌フォーラム実行委員会」にお振込下さい。

2025年6月13日(金)(当日消印有効)

■申込締切 2025年6月13日(金)

■主催 長野県塩尻市／塩尻市教育委員会／

全国短歌フォーラム実行委員会

■選者 佐佐木 幸綱氏・永田和宏氏・小島ゆかり氏

■賞 最優秀賞・優秀賞・入選・奨励賞

■発表 作品集と全国短歌フォーラムホームページ

〒399-0738 長野県塩尻市大門7-4-3

■申込先 全国短歌フォーラム事務局

電話 0263-52-0903(直) ファクス 0263-53-7604

島木赤彦研究会入会案内

●島木赤彦研究会は昭和45年に設立。支部は昭和49年に長野県支部として設立。

●会長 高橋 克

●島木赤彦研究会は、近代日本文学および、近代教育における島木赤彦の業績の資料保全と、調査研究を目的としています。

●そのための研究活動として、研究大会の開催・資料展示会・東京例会・支部研究会などを行っています。

●投稿などの機会が得られます。●(年会費二五〇〇円)

●本部事務局 江戸川大学 中島金太郎研究室内

〒270-0198 千葉県流山市駒木四七四

☎ 〇四(七一一二) 〇六六一(代表)





編集
後記

▽「冬雷」の表紙絵をたどる」に、一九九九年と二〇〇〇年の表紙絵がある。後にこの表紙絵は川又幸子氏、大山敏夫氏の冬雷文庫歌集の表紙に再利用された。二〇〇六年からの印刷データの内製化により、こうしたことも自在に出来る環境となったのである。

▽二〇〇〇年一月号は木島先生が亡くなられてから急遽再編集して発行されたもので出詠者数は今と比べると二倍以上。そのことだけでも時代の移り変わりを感じる。▽会員数が減少してもその時代にあつた雑誌づくりや運営で充実した活動が出来るのではないかと思う。赤字が出ないよう基準のページ数も定まったようだ。あとはいかにそれぞれが個性ある自分の歌を作って行くかであろう。

（桜井美保子）

▽今月は岩手県大船渡市の山火事を六名が23首詠んでおられる。震災に遭った地に再びの災禍で胸が痛む。乾燥・強風・風向の変化のため延焼を続け三月初旬の雨の後漸く鎮圧された。ホースを担ぎ傾斜を這う消防士や焦げた臭いを詠む田端さん。漸く降った雨を神が降りたとか歌う村上さん。津田さんは夜空を染める炎を、松崎さんは実家を案じて、いずれも臨場感に溢れ現地の人の実感がこもり心に響く。ニュースを見た人も歌わずにおれない。機会詩としての短歌の力を感じた。

（橋美千代）

▽桜の花が咲き始め、すっかり春である。先月欠詠の山崎英子さんの作品が寄せられたものの、逆に歌の見えない方もちらほら。なかなか全員が揃うことはないものだと思う。▽そういうなかで、各作品欄もだんだん使用スペースが減る傾向にある。出詠者数、歌数が減ってゆくのかから仕方ないことか。今

後は今号の本文56ページが小誌の標準となる事だろう。これをキープできたら、大きな赤字を出さずにギリギリ運営できそうか。

▽七年間続いた『冬雷作品年鑑』が終了したので、今後は短歌会文庫シリーズの再開に切替える。参加希望者は手をあげよう。（大山敏夫）▽三月もあと数日を残すだけとなった。日差しが強くなってきた。部屋の外で片付けをしていると汗ばむほどだが暫くして落ち着くと暖房が欲しくなる。十九日午前中には突然大きな雪が降ってきて驚いた。気温の差が大きいので体調に気をつけてお過ごしください。▽懐かしさもあって「冬雷の表紙絵をたどる」を楽しみにしているが、今月は一九九九年と二〇〇〇年の二年分が載っている。一九九九年は十二月九日に木島先生が急逝された年である。電話で知らせて下さった奥様が聞き返す私に「だからね、亡くなったのよ。死んじゃったの」と大きな

声で怒鳴るように仰った声は今も忘れない。大山氏と小宮氏と三人で、眠っているような先生の横で座っていたことも。あれから二十六年が過ぎて私も先生の歳に近くなってきた。二〇〇〇年の表紙絵は「雪のなき低き山々ことごとく見ゆる冬野にわが入りてゆく」という川又さんの歌を加納さんが絵にしたものだけれどこの歌を選んだ先生は「夫君亡き後の詠嘆だがここには生への歓喜（悲しみと謂ってもよい）」と、出発を新たにした作者の覚悟と姿勢が感じられる。歌はあくまでも事柄ではなく声調にある。」と高く評価された。作者の川又さんは「自分ではさう力を入れたものではなかったので自選なら落としたかもしれない」と、大きな違いがある。歌は作者のものだが優れた読者を得て大きく成長するのもかもしれない。

▽御寄附厚く御礼申し上げます。
（小林芳枝）
磯田ひさ子様

《冬雷規定・掲載用》

- 一、本会は冬雷短歌会と称し昭和三十七年四月一日創立した。（代表は大山敏夫）
- 一、事務局は「東京都葛飾区白鳥四の十五の九の四〇九 小林方」に置き、責任者小林芳枝とする。（事務局は副代表を兼務）
- 一、短歌を通して会員相互の親睦を深め、短歌の道の向上をはかると共に地域社会の文化の発展に寄与する事を目的とする。
- 一、会費を納入すれば誰でも会員になれる。
- 一、長年選者等を務め著しい功績のある会員を名誉会員とする事がある。
- 一、会員は本会主催の諸会合に参加出来る。
- 一、月刊誌「冬雷」を発行する。会員は「冬雷」に作品および文章を投稿できる。ただし取捨は編集部一任とする。「冬雷」の発行所を「川越市藤間五四〇の二の二〇七 大山方」とする。
- 一、編集委員若干名を選出して、合議によって「冬雷」の制作や会の運営に当る。
- 一、会費は年額（購読料を含む）次の通りとし、六か月以上前納とする。ただし途中退会された場合の会費は返金しない。
*会費は原則として振替にて納入する事。
A 作品三欄所属会員 一四〇〇〇円
B 作品二欄所属会員 一七〇〇〇円
C 作品一欄所属会員 二〇〇〇〇円
D 維持会員（二部購入）二六〇〇〇円
E 購読会員 八〇〇〇円
- 一、この会則は、二〇二〇年一月一日より執行する。

《投稿規定》

- 一、投稿は月一回未発表9首まで投稿できる。原稿用紙はB5判二百字詰めタテ型を使用し、何月号、所属作品欄を明記して各作品欄担当選者宛に直送する。原稿用紙が二枚以上になる時は右肩を綴じる。締切りは十五日、発表は翌々月号。担当選者は原則として左記。
冬雷集・作品三欄（メール投稿分）
作品一欄 ・担当 大山 敏夫
作品二欄・作品三欄（手書き投稿分） ・担当 桜井美保子
・担当 小林 芳枝
一、表記は自由とするが、新仮名希望者は氏名の下に☆印を記入する。
一、無料で添削に応じる。一通を返信用として必ず同じ歌稿を二通、及び返信先を表記した封筒に切手を貼り同封する。一週間以内に戻すことに努めている。添削は入会後五年程度を目処とする。
《Eメールでの投稿案内》
白地に一首ずつベタ打ちにして、行間も空けないこと。頭を一字分空けたり、一首を二行に分断したり、余分な番号を付けたたり、色を付けたたりしないこと。分量の少ない場合は通常のメール本文、又はケータイ・スマホでも送信可能。
Eメールによる投稿は左記で対応する。
大山 敏夫 tourai-oyama@nifty.com
小林 芳枝 kysie@nifty.com
桜井美保子 mhoko496@s4.dion.ne.jp

《選者住所》	大山 敏夫	350-1142 川越市藤間	540-2-207	☎	090-2565-2263
	小林 芳枝	125-0063 葛飾区白鳥	4-15-9-409	☎	03-3604-3655
	桜井美保子	235-0022 横浜市磯子区汐見台	2-2-2-608	☎	090-6029-0590

2025 年 5 月 1 日発行

編集発行人 大 山 敏 夫
データ制作 冬 雷 編 集 室
印刷・製本 (株) ローヤル企画
発 行 所 冬 雷 短 歌 会
350-1142 川越市藤間 540-2-207
電話 090-2565-2263
事 務 局 125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409
振替 00140-8-92027
ホームページ http://www.tourai.jp

頒 価 700 円